# リリカルとらハ～mixバージョン～

天笑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルとらハ～ｍｉｘバージョン～

【Ｎコード】
Ｎ６２３０Ｔ

【作者名】
天笑

【あらすじ】
オリ主がリリカルとらハの世界に転生するようです。
転生した世界でオリ主は、どのような物語を紡ぐのか……。
それは神すら予測できない。

※これはオリ主チート、ハーレム、原作崩壊、ギャグ多しです。

また、とらハ成分が少し混じりますので、それがイヤな人は読まない方がよいです。

駄文で初めての作品、更には勢いだけで進めていきますので、できれば生温かい目で見守ってください。

それでは、開幕～。

**ぷろろ〜ぐ**

「あれ？ここは？」

気づいたら辺り一面が真っ白な世界……

「いや、ほんとに意味わか「見つけました」、ん？」

声がする方に顔を向けると十二単？みたいな服をきた黒髪美人な人がいた

「おぉ〜、すげぇ美人さんだ〜。……で、どちらさん？」

「ふふ、ありがとうございます。私は天照大神という者です」

「天照大神っつーと……たしか、太陽神か最高神？だったよね。……えっ、マジで？」

この美人さんが神様しかも最高神。

……あれ？ってことは、もしかしてここは…

「あなたが考えている通り、とは少し違いますが概ね当たっていますよ。そして……率直に言います。あなたは……死にました」

と重苦しく言う。

に対して

「ほうほう、俺は死んじまったのか」

とお気楽に納得してる俺。
なんか天照さんが少し驚いた顔をしてる。
「ん？何故にそんな顔をしてますか？」
聞いてみた。
「いえ、普通はもっと驚いたり、自分の死を受け入れなかったりなどの反応をすると思ったのですが……」
ああ、なるほどそのことか
「なに、人間いつかは死にます。ただそれが自分の時は今だったということっす。ちなみに死因は何だったんですかね？」
まだ俺は21歳だけど後悔なく自分は楽しんで生きたという自信があるからな。
ただ、どうやって自分が死んだかさっぱり思い出せんから原因ぐらいは知っておきたいので質問してみた。
質問した瞬間、天照さんの顔が苦虫を噛んだような顔になり
「そのことなんですが……ほんとにすいませんでした！」
と、いきなり頭を下げ謝ってきた。
なんか訳ありっぽいので理由を聞いてみた
……説明中……

「というわけなんです」

申し訳ない表情をしながら教えてくれた。

要約すると

バスが衝突事故にあう→俺は横転した車に巻き込まれそうになった
見知らぬ女性を庇った→結果、死亡→実はその見知らぬ女性は人間
界に羽を伸ばしにきていた天照さんであった

少し思ったことがあったので聞いてみた。

「天照さんに聞きたいことがあるんだけど？」

「はい、何でしょう」

俯いていた顔を上げ、気を引き締めた真剣な表情をする

「そんな気張った顔をされてもあれなんだけど……どこか怪我でもしました？」

「え？あっはい、えぇっと、あの、ありません……けど…」
そんな言葉が帰ってくると思わなかったようで戸惑った顔をしながら答えてくれる。それを聞いて

「そかそか怪我がなくて何より。うんうん」
一人で満足していると
天照さんがなんか慌てて聞いてきた
「あの！もっと他に言うことはないんですか？！例えば、おまえを庇ったせいで死んだんだ、とか。神様なんだからその時に助けろ、とか。」
などとまくし立てるように言う。
そんな天照さんに一言
「んにゃ別に。」
と言う俺にポカンとした表情を浮かべる天照さん。

少しすると天照さんがいきなり笑いだした。
「ふふっ、あはは！あなたは面白い方ですね。もっと罵倒されたりすると思ってたんですが、まさかこちらの心配をしてくれるなんて」
笑う天照さん。
それを見て俺は
（笑った顔はすごく可愛いな～）
と思った。

ひとしきり笑った天照さんが落ち着いたところで聞いてみた。

「ところで俺の処遇は？天国行き？地獄行き？」

「その事なんですが、一つ提案があります。。あの、もしもう一度生きれるなら生きてみたいですか？」

「へっ？」

**チート……と言えるのか？**

天照さんが言った言葉に興味を持ったので詳しい事を聞く事にした

「流石に私としても庇って貰った人をそのまま死後の世界に行かせるのは忍びないので、同じ世界は無理ですけど別の世界にまあ転生という形で生きれるようにしようかと思いここに来たのです」

「ちなみにどんな世界なの？」

世界によってはあまり行きたくないので聞いてみた。

「私の管轄する世界の中で［リリカルなのは］というのがありますから、そこですね」

リリカルなのはって……あれってアニメじゃなかったか？

「あれってアニメじゃないの？」

「存在しますよ、アニメの世界でも人の思いが強く集まれば世界はできますから、まあ厳密には似た世界になりますが」

「へぇ～、そうなんだ。まあ詳しい事はめんどくさいから聞かないでおくけど、もう一つ。俺みたいな転生者って他にもいるの？」

「いません、これは私の独断ですし」

さらりと発言する天照さん

「それって他にいるかは知らないけど他の神様的にマズいのでは？」

「自分の管轄する世界ですので大丈夫です」

まあ迷惑にならんのなら断る理由もないかな

「じゃあお願いしようかな」

「わかりました。では何か欲しい能力等はありますか？」

「ん？何ぞソレ？」

「あの世界には魔法があります。もし何かに巻き込まれたとき等に生きる術がいるでしょう。せっかく生き返るのにまたすぐ死んでしまうのも嫌でしょうし」

そういや魔法があったな。原作には進んで関わるつもりもないけど

「なんか制限みたいなのはあるの？」

「死者の蘇生や人を作り出す等は無理ですね。それ以外だと大抵は叶えますよ。もしやりたいならアニメの出来事も改変して問題ないです」

それじゃあいくつか言ってみようか。

「じゃあ、魔力をかなり多めというか出来るなら魔力切れを起こすことがないくらい欲しい。後、リリカル世界の魔法知識が全部欲しい。それと自分の魔力を自分が思う形に使えるようにして欲しいか

な」

言ってみたけど、大丈夫かね。と、心配したんだけど

「はい、大丈夫です。魔力はほぼ無限にしておきます。ただ知識の方は膨大ですのであちらの魔法媒体であるデバイスに積めておきますね。他にはありますか？」

そういやデバイスがあったな、忘れてた。

「デバイスなんだけど、ＡＩを積んだ奴だっけ？それにして欲しいんだけど」

「インテリジェントデバイスですね、転生した時につけておきます。武装などのリクエストはありますか？」

うむぅ、そうだなぁ……よし！！

「俺の部屋にあるｂｌａｃｋ　ｃａｔっていう漫画があるんだけどそれに登場するクロノナンバーズの武器で、セフィリアのクライスト、ジェノスのエクセリオン、トレインのハーディスの３タイプに変化できるようにして欲しいかな」

あの漫画はかなり好きだ。もしキャラに会えるなら大好きなセフィリアに会ってみてー！！！

「……了解です。デバイスの形は何にしますか？」

「そうだな、リング型がいい」

ピアスとかネックレスとかは柄じゃないからな～

「他にはありますか？」

それぐらいで別にいいかな……

「ちなみに身体能力とかは生前のままなん？」

「そうですね、魔力が膨大ですのでそれに耐えきれる肉体にはなってます。いわゆるバグキャラです」

バグキャラですか、そうですか。まあ、いいけどさ。

「ん、他は特にいいや。ありがとね、天照さん」

「いいえ、こちらこそありがとうございました。あなたの新しい人生に幸せがあるように見守っています」

俺の周りが光り始めて全身を包んでいく。

「おっと、なんだか別れっぽいな。んじゃまあ、さよならって言葉はいやだからな。

《またな》、天照さん」

その言葉を最後に俺はより一層強くなった光に包まれ意識を手放し

た。

「ふふふ、《またな》ですか。私もあなたにはもう一度会いたいですね。だから、《また会いましょう、双麻さま》」

そう言うと天照も消えていった。

**設定……考えるの難しいですね（>＿<）**

主人公

旧姓・天城　双麻♂
享年２１歳、転生時５歳
容姿は、ブラックキャットのナンバーズ？・リン＝シャオリー、基本的な性格はトレイン＝ハートネットな感じ。
自分がやると決めた事には徹底的にやる一面もある。
漫画やアニメなどは結構好き、というか大好物。

武術に関しては何気にマスタークラス。

◎能力
★魔力がほぼ無限
★魔力に耐えれる肉体（※バグと考えて下さい）
★自分の魔力を自分が思ったように使用できる。
★？？？（天照大神がおまけでつけたので本人は気づいてない）

セフィリア♀
愛称【リア】
インテリジェントデバイスで術式は混合タイプ。性格は天照大神が要望を聞いたときに主人公がセフィリア好き～と考えていたのでブラックキャットのセフィリアの人格を良かれと思い投影した。なので基本は礼儀正しく優しい性格なのだが、主人公に関する事になるとキャラ崩壊を起こす面がある。
他にも便利機能や特殊機能をつけられている。
演算能力などはもちろんチート仕様。

天照大神♀

最高神

主人公が死ぬ時に助けた女神。
時々、天界から主人公の様子をうかがっている。

**転生……むしろトリップでは？……いや、これは転生だ！！（前書き）**

デバイスのキャラが崩壊してます。

想像してたのと違う！！とかつまんねーと思う場面もあります。

それでも無問題！

読んでやるよ！！

という気があれば、どうぞｍ（＿＿）ｍ

**転生……むしろトリップでは？……いや、これは転生だ！！**

「マスター、起きてください」

んぅ、なんか女の人の声が聞こえる。

「んぁ、誰だ？」

声がしたので、起き上がり周りを見渡すが、木々ばっかり。上を見れば朝方なのか太陽が出始めてる。

状況把握に数十秒かけて理解した。

「そういや転生だっけか。したんだな。じゃあ今の声は？」

「こちらですマスター」

声をする方に向けると右腕にリングが着けられており、そこから声がする。

「おはようございます、マスター」

「むぃ、おはよう。……おまえさんは、もしや俺のデバイスさんですか？」

「はい」

おぉ、なんか転生した実感が湧いてきた。

そして、聞きたい事がいくつかあるので聞こうとした時に気づいた。

「え～と、そういや名前を決めてなかったな。何がいいかな～？」

そんな事を呟くと

「楽しみです」

プレッシャーを与えてきた。

「……候補が多すぎて決めにくいな」

悩む。そんな俺を見て

「ふふ。思いつかないのではなく多すぎるのですか。普通は逆でしょうに」

微笑ましく言われた。

「……ふっと頭に浮かんだのが俺の好きな漫画のキャラの名前なんだけど……借り物みたいで嫌だよな？」

オリジナリティがないし、ダメかな～と思ったので聞いてみた。

「マスターの好きなキャラ…ですか？どんな人物か尋ねてみても構いませんか？」

言われたので、自分自身が勝手に想像してる所もあることを先に言っておき答えた。

「ブラックキャットっていう漫画でセフィリアっていう女性がいるんだよ。その人物は……（中略）。まあ、俺が一番大好きなキャラというか人だな。ぶっちゃけ言うと嫁にしたい！！」

そんなセフィリアファンを敵に回す発言をする俺。
何も返答が来ないので、流石に呆れたかなと思ってると

「／／／／マスター！！あの！私は！その……お嫁になってもいいですよ！？」

この子に何が起きた？！

？？？side

「嫁にしたい！！」

マスターが好きな人物をどんな方かを聞いてみたらセフィリア・アークスが好きと言って、どんな所が好きだなどを教えてくれ最後には伴侶にしたいと……
マスターにはまだ言ってませんでしたが、私の人格は元がセフィリア・アークスという人物からなっていますので、マスターの好みに合っているようです。ただ…厳密には人格を投影してるので本人とは違いますけど…私に求婚してくれているような感じがして…／／／。
いえ、私はセフィリアと同じ人物と言って過言ではないのでしょうか？むしろ私が本人でしょう！！！（※違いますよ～）作者、黙りなさい。（はい）はっ！？そうです。マスターから愛のお言葉をもらったのですから、早く返事をしなければ！！

「／／／／マスター！！あの！私は！その……お嫁になってもいいですよ！？」

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

いきなり変な発言をしたデバイスを宥め、落ち着いた所で改めて名前を決めることにしたんだけど、セフィリアで問題ないという事なのでそれで決定した。
その時に名前をそのまま呼ぶのも他人行儀な感じがしたので、【リア】と愛称で呼んだときも変になった

（ちなみに理由を聞いても「気にしないでください」「言いません」などの一点張りだったため、もう気にしないことにした。）

「うむ。とりあえずバリアジャケットやその他の魔法関連はひとまず置いといて……うん、なんか違和感感じてたんだけど……やっとわかったわ」

何を理解したのかわからなかったリアは

「どうされました？何か問題でもありましたか？」

と心配しながら尋ねてきた。

「うん。いやね。テンプレ乙というか……まあ……
……俺、いま……子供になってるな……orz」
そう、なんか目線も低いし手もちっさいな～と違和感を感じて、まさか！？と思いきやのテンプレスタートかよ！！！

凹んでいた所をリアに慰めてもらい（途中、「落ち込んでいる姿も……アリです！！」という発言が聞こえたがスルーした）、気をとり直し現在位置を確認する事にした。

「で、ここってどこなの？」

改めて周りを見渡せど木ばっかりで山の中か森だとはわかるんだけど、日本なのか外国なのかはわからないのでリアに確かめてもらった。

「ここは海鳴市にある桜台という場所に該当します。少し上に歩けば展望台があるみたいですね」

それを聞いて、ひとまず移動しようかとリアに言おうとしたら、いきなり頭の中から
『マスター、人がきます』
と聞こえたので驚いた。

『念話です。頭の中で語りかけるようにして下さい』

教えてくれたのでやってみた。

『こんな感じか？』

『はい。大丈夫です』

なんとか成功し、やっぱ魔法は便利だなと感心しながら

『人が来るって言ってたけど、複数？』

『いえ、1人です。どうやら女性のようです』

そんなやり取りをし、会ってみようか？やり過ごすか？と迷っていたら、向こうが先に俺を見つけ

「おお！なんか声がするなと思て、来てみたら。可愛らしい子供や～」

どっかで聞いた声と関西弁で言ってきた。

**転生……むしろトリップでは？……いや、これは転生だ！！（後書き）**

……最初、考えていた内容から大きくハズれていく。

（ＴｏＴ）

……小説を書いている方をほんとに尊敬します。

こんな駄目作者と駄文が続きますが、よろしくお願いします

**原作にいなかったよね……だけど！そんなの関係ねー！！**

？？？ｓｉｄｅ

「はあ～、久々に海鳴に戻ってきて耕介くんのご飯食べた後に、朝の散歩すんのは気持ちええなぁ～。」

そんな事を呟きながら、うちは慣れ親しんだ場所を歩く。
昔、さざなみ女子寮に住んでた時から、朝の散歩は日課みたいなもんやったし、桜台の森の中もお手のもんや

（ここはあまり変わらんな～）

～～♪～～♪

鼻歌をしながら胸元で朝日を浴び光るペンダントを手でいじりながら奥に入っていく途中

「……。」

人の声が聞こえたような気がして足を止めた。

（ん？なんやどっかから声が聞こえたような……）

そう思い耳をすますと

「…」聞こえた。

（向こうからやな。こんな朝早くにしかもこんな場所に誰やろ？）

うちはなんとなく気になったので、声がした方へ足を進めた。

（なんかーーに最初会ったときもこんな感じやったなぁ）

と少し昔を思い出しながら木々の間を通り、声のした所につくと……子供がいた。

その子を見たとき驚いたと同時にうちは奇跡はあるって思った

（ーーや……見間違えへん。うちが一番大好きな人や）

懐かしさと嬉しさとそれ以上に愛しい気持ちが胸の奥から溢れてくる。

（抱き締めたい。おかえりっていいたい。……けど、今はまだ）

向こうはこちらを見てキョトンとした顔でうちを見てた。

（う〜〜ん、めっちゃかわええ！……あかん…我慢ガマン……あっちも？顔してるしとにかく声をかけよか）

「おお〜。なんや声がするなと思て、来てみたら。可愛らしい子供や〜。」

と本音が混じった事を口に出してもうた。それを聞いて、その子は、あれ？ってな顔で首を傾げた。

（なんかマズい事言うてもうたかな。）

内心で少し焦りながら、うちはその子に近づいていった。

side end

**原作にいなかったよね……だけど！そんなの関係ねー！！（後書き）**

これで……いいのか？

いくら考えても

良い展開、そして文章が思い浮かばない

ｏｒｚ

文才が欲しい（Ｔ＿Ｔ）

**人外魔境……いえ、リア充（耕助）のテリトリーです。（前書き）**

すいません、この作品は原作突入まですこしだけかかります。

それでもＯＫという駄文に付き合ってくれる心の広い方はどうぞよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

**人外魔境……いえ、リア充（耕助）のテリトリーです。**

「かわいい～♪」

と言いながら抱きついてくる三つ編みをした綺麗というか可愛らしいが当てはまる女性。そして

「散歩に出かけて帰ってきたら…まさか子供を拾ってくるとは……。」

苦笑いをしながら言う背の高い男性。

その男性の隣にいる綺麗な銀髪でくわえタバコをしてる女性が

「それで？もう一度聞くけど…この子、どうしたんだ？ゆうひ」

俺をここに連れてきた張本人である女性に聞いていた。

そう俺はいま……海鳴でも有数の人外魔境の巣窟、さざなみ女子寮にいる。なので俺の知ってる知識として最初の女性はこの寮のオーナーである槇原愛さん、背の高い男性はこの寮の管理人である槇原耕助さん、銀髪の女性は2人の養娘であるリスティ・槇原さん。最後に、

「やから、うちの子やで～♪」

俺を膝の上にのせ、後ろから抱き締めながらリスティさんの質問の答えになっていないような返事をする女性、椎名ゆうひさん。

あの桜台の森であった女性は、とらハ２のメインヒロインである椎名　ゆうひさんであった。
彼女は俺を見つけた後、迷子だと思ったらしく「迷子なんかな？うちが家まで送ったるよ」と頭を撫でながら優しく言ってくれた。しかし、現在の俺は家なき子であり、リリカルなのはの世界でまさかとらハの人物に会うとは思ってなかったため少し混乱していたので、その言葉に思わず「あっ、家ないです」と答えてしまった。それを聞いたゆうひさんが驚いた顔をした後、「家出？親は？」と立てつづけに質問してきた。
俺は更に困惑し、どう答えようかと迷って言いあぐねていたら、いきなりゆうひさんが抱き締めてきたのだ。その時、彼女は「別に言いたくないんならええんよ」と慈愛に満ちた声で言ってきた。ゆうひさんの中で俺の事は可哀想な子供になっているんだろうなぁと思った。
（ただ、最初に俺を見つけた時のゆうひさんの表情が気になったけど……）

ゆうひさんの抱擁が終わった後、お互いに自己紹介をした。（ゆうひさんは俺のことを「双ちゃんやな♪」と呼び、俺は変えてもらおうとしたが無理だった）するとゆうひさんはいきなり「うん、決まりや♪今日から双ちゃんはうちの子や」なんて爆弾発言、俺はいきなりな発言に固まり気づいたらさざなみ寮に連れてこられて現在の状況になっている。

……なんでやねん！？

**人外魔境……いえ、リア充（耕助）のテリトリーです。（後書き）**

……まだ少ししか書いてないのに……お気に入り登録件数があった（汗）

流石、原作の人気は伊達じゃねぇ（「○」；）

これからも頑張って書いていくので、できれば見捨てないでくださいm（＿＿）m

**俺は男ではない……漢だぁーーーー！！（前書き）**

他の方の小説より展開が遅すぎですね。

それでもＯＫなんだよ～という心の広い方はどうぞよろしく

**俺は男ではない……漢だぁーーーー！！**

い、今の状況を説明するぜ。目の前にいる愛さんは涙を流しながら俺の方を見ている。その隣では耕助さんが目を瞑り腕を組み険しい顔をしている。リスティさんは「ちょっと風にあたってくる」といいリビングの窓から出ていき今は外の庭にいる。横を通り過ぎて行くときに頭をポンポンと叩かれ優しい目を向けてくれた。

……何を言ってるかわからねぇと思うが、俺も何が起きてるのかサッパリわからねぇ。サッパリ妖精とかダイコン妖精とかパルプンテとかそんなチャチなもんじゃねぇ！？……もっと恐ろしい何かの片鱗を味わったぜぇ。

『マスター、ネタ思考はやめてください』

……リアに心を読まれ念話でツッコミを受けた。

まあ、ゆうひさんが耕助さんらに事情を説明したらこうなったとしか言いようがない。
ただ、その説明した内容がなぁ～……簡単に纏めると

俺の両親は事故で死んだ。親戚をたらい回しにさせられ行き着いた先で虐待を受けた。いままでは耐えたが性的な虐待も受けそうになったため、耐えきれず逃げた。そしてもう5日間は公園などの水でなんとか飢えをしのぎ野宿していた所にゆうひさんと会った。
……突っ込み所が満載だな、おい。しかもゆうひさん、こっちを見てどや顔してるし確信犯だよ、この人。

とにかく、3人はゆうひさんの説明を受け、冒頭のような状況になった。

耕助さんらがなんとか落ち着いた所で、話を再開する。といっても、事情を聞いた3人は俺を育てる事に異論はないみたいだ。今は、ゆうひさんが育てるのは、大変じゃないか？さざなみ寮で育てたほうが…などと本人そっちのけで相談してる。
俺は最初「迷惑だからいいです」と断りを入れたら普通にスルーされた。その後にも俺は挫けずに何度か話の合間に言ったんだけど、最後には耕助さん・愛さん・ゆうひさんの3人は笑顔で「「「却下」」」と返してきた時に諦めたよ。

3人が相談してる間に

『どうしようか？』

『そうですね……マスターの住居をいち早く確保するには保護されるべきかと。ただ、魔導師ということを隠したいなら断る方が懸命でしょう』

リアの言葉を聞き

『う～ん……そうだな。金もないしこのまま保護されようか』

『マスターの御心のままに。』

リアとの会話を終え、ゆうひさんの膝から降り（なんとか離しても

らった）、手持ち無沙汰になった俺は庭にいるリスティさんに相手をしてもらおうと外にでた。
リスティさんを見つけた時、なんか悲しいというか寂しいというかそんな顔をしていたので
「どうしたんですか？」
と聞いてみた。

リスティｓｉｄｅ

（ふぅ、いつの世も腐った連中はいるな）
そんな事を考えながら煙草を吹かす。

ゆうひが可愛らしいお嬢ちゃんを連れてきた時は驚いたけど、事情を聞いたらゆうひらしいと思った。同時に、昔の自分の境遇を思い出し少し鬱になった。

（もう過ぎた事……なんだけど、ふいに思い出した時は嫌な気分になる）

気持ちがやや凹み気味になっていると

「どうしたんですか？」

件の少女が声をかけてきた。

side end

声を掛けた俺に少しぎこちないけど柔らかい笑顔を浮かべながら「なんでもない」と言いながら頭を撫でてきた。
（なんでもないなら、あんな表情しないよな～）
美人に悲しい表情は似合わね～と思ったので、リスティさんにしゃがんでもらって、向かい合い……額にキスをした。

再びリスティside

ボクが頭を撫でてあげたら、少し首を傾げ何か思いついたのかしゃがんで欲しいと言ってきたので、言うとおりにしたら……額に暖かいぬくもりを感じた。
（……えっ？）
何をされたか一瞬わからなかったけど、すぐに理解した。
（キス……された？）
額に手を当てながら少女の方に顔を向け、いきなりどうしたんだと尋ねると彼女は無邪気な笑顔を浮かべ言った。
「元気になるおまじないですよ～」

それを聞き何でそんなおまじないをしてきたか理解した。

（ふぅ。こんな5歳の子に慰められるとは……ボクもまだまだだ）

苦笑しそう思ったけど、やられっ放しは癪だし慰めてくれた感謝の気持ちも込め

「それじゃお返しだ。」と言い、彼女の唇にキスを仕返した。

side end

「それじゃお返しだ。」

そんな事を言って顔を近づけてきたと思ったら……

唇に暖かい感触……今、何が起きた？唇に何か当たったよね？リスティさんが近づいて、暖かい感触……キス？えっ？あれ？……

……キスされたーーーーーーーーーーー！？

『……マスター。……彼女を冥府へと誘いましょう』

あまりの出来事に驚愕し固まっているとリアが念話でいきなりリスティさんを亡き者にしようと言う　。

『いや！？いきなり何言ってんのさ！それはダメでしょ』

それを聞き宥めるんだが

『しかしですね！！マスターもマスターです！元気になって欲しいという気持ちはわかりますが！何故、額にキスなんですか！？』

こっちに怒りの矛先が！？

『いや、前世の頃には結構やってたし……やったら何か皆は元気になったし……』

と言ったら男性にもしたのかと聞かれたが……そういえば男にはやらなかったな～。友人とか後輩とかにやってあげようとしたら「何かが壊れる」「戻れなくなる」とか言って断られたな。それを言ったらリアは

『マスター……あなたを天然及び朴念仁です』

某双子の妹メイド探偵が言うような発言をしてきた。なんでさ？

リアをとりあえず宥めた時に（私にも今度してくださいと言ってきた。どうやればいいかわからないけど了承したら落ちついた）、リスティさんは飄々とした態度で聞き捨てならない発言をした。

「女同士だからノーカンだろ。気にしない、気にしない。」

……おかしいな、耳がおかしk『いえ、彼女はマスターを女性と勘違いしてます』……ですよねぇ～。

間違いを正すべく

「あの…俺は男ですよ」

「……」

俺が言ったのを聞いたらポカーンとした顔をし（あっ、タバコ落とした）

「Ｒｅａｌｌｙ？（マジ？）」

よほど驚いたのか英語になるリスティさん。

「ｙｅｓ，ｎｏｎ　ｇｉｒｌ．Ｉ'ｍ　ｂｏｙ．（はい、男ですよ）」

と答えてあげた。

固まるリスティさん。

……一瞬の静寂が訪れる。そして、

「ハァァァァァァ！！？」

時は動き出す。

おまけ

「あのマスター。少し気になったんですが……まさかとは思いますが……初めてだったとか……ではありませんよね？」

「あははは～、まさか～」

「ですよね。（ホッ」

「初めてに決まってんじゃん。俺ってモテないから女性と付き合ったこともないし～、まあリスティさんは美人で綺麗だからもらわれて逆に良かったかな」

……シ～ン。

「……あの泥棒猫を滅殺決定です！！」

**俺は男ではない……漢だぁーーーー！！（後書き）**

あれ？
キャラぶれが激しすぎる上に、考えていた内容と全然違う展開に…
……

すいませんでしたーーーーm（＿＿）m

**逆セクハラ……ありと思います！！（前書き）**

「原作に～」から「俺は～」が少し内容変わってます。

もうご都合主義とか変な展開とか色々ありますが気にせず書いていきます。

それでもド～ンと受け止めてくれるのなら、どうぞお読み下さい。

**逆セクハラ……ありと思います！！**

驚いたリスティさんは体をペタペタと触ったりして確認をしてやっと信じた。（あれは確認じゃなくセクハラだったｏｒｚ）

その後は2人で他愛もない話をしたりしてリビングに戻ると、耕助さんらも丁度話が終わり3人で世間話をしていた。

戻ってきた俺達に気づいたゆうひさんは

「双ちゃん。ちょっとの間はさざなみ寮がお家になるんやけど、ええか？」

そう言ってきた。

詳細を聞いてみるとゆうひさんは歌手デビューしたばかりで今はイギリスのクリステラソングスクールの寮にいる。一年ぐらいしたら海鳴を拠点に活動するのでその時に一緒に住む。その間はさざなみ寮でお世話になる。ということらしい。別に異論はないので了承した。

そして今、俺はゆうひさんの見送りのため空港にきている。

「双ちゃん、ちゃんといい子にしてるんやで。耕助くんらにあんまり迷惑かけたらあかんよ。何かあったらちゃんと連絡するんやで。

連絡先はわかるな？怪我とかには注意するんやで。それから……」
もうすっかり母親なゆうひさんはあれこれと言ってくる。まあ、見た目が5歳児だから仕方がないが……
「大丈夫です。ゆうひさｎ「ちゃう！」…はい？」
「うちのことはお母さん。もしくはママ。後、敬語はなしや」
俺の鼻に指を突きつけ言ってくる。
「いや、でも…」
戸惑いながら言おうとしたら明後日の方を向き拗ねた表情をする。
「……ハァ……母さん。……これでいいでしょ」
諦めた。ゆうひさんはこれを聞き
「うん、合格や。そんな良い子の双ちゃんにご褒美や～」
と笑顔でいい頬にキスしてきた。
「ゆうひ母さん……まあ好いてくれるのは嬉しいんだけど…なんでそんなに俺を好いてくれるの？」
会った当初から俺にめちゃくちゃ好意を寄せてくる母さん。かなり疑問だったので聞いてみた。すると
「禁則事項や♪」

と返ってきた。そのネタ知ってたんだと思いながら、まぁいいかと考えてると

「双ちゃんがもっと大きくなったらちゃんと教えたるよ。けど一番の理由は単純やで。…双ちゃんが大好きやからやで」

無邪気な笑顔で言ってきた。それを聞き毒気を抜かれ俺も自然と笑顔になり

「そっか。…俺もゆうひ母さんが大好きだよ。」

と返した。

……何故か顔を赤らめる母さん。小声で「……ぁかん……まだ子供やで」「……押さえるんや……」など意味が分からないことを言ってた。

そんなやり取りをしてたら母さんのフライト時間がやってきた。

「時間やね、ほな双ちゃん。いってきま～す♪」

陽気に少し出かけてくるみたいな感じで言う母さん。

「いってらっしゃ～い」

俺も元気に陽気に返してあげた。

「……行っちゃったね～」

呟く俺。それに

「なに、すぐ帰ってくるさ」

いつの間にか後ろにいた耕助さん。

「どこにいってたんですか？」

「少し空港内をぶらっとね。まっ、帰りますか。一年だけだけど、よろしくな双麻。」

「はい、一年間お世話になります」

耕助さんと一緒に空港を後にする。

おまけ

「あっ、そうだ。帰ったら……まぁなんだ、頑張れよ」

不吉なことを言う耕助さん。

「何かあるんですか？」

「……愛さん達が「双ちゃん分を補給する」って言ってた」

双ちゃん分……愛さん・ゆうひ母さん、何故かリスティさんの３人が俺を抱き締めもみくちゃにすることにより補給される謎の栄養分……らしい。やられる俺はたまったものじゃない

「……少し用事を思い出しました」

2、3日はさざなみ寮に戻らないようにしようと思い振り返ると、ボスっと誰かにぶつかった。

「あっ、すいまｓ……何故？」

……なんでリスティさんが……さっきまでいなかったよね

「ハ～イ♪双麻。逃がさないよ。」

笑顔は素敵だけど……タスケテ、耕助さん。そんな目を向けると

「……（フルフル」

……希望はなくなったｏｒｚ

**逆セクハラ……ありと思います！！（後書き）**

さて……ゆうひを……どうしようかな……流石にハーレム入りはマズい……かな。

展開はめちゃくちゃ強引だけど考えてます。

どうですかね、皆さん？

**ごた～いめ～ん……可愛ければ無問題！！（前書き）**

ほんと、話の進みが遅いわ。

予定としては後1話か2話ぐらい入れて原作開始にしたいんだけど……さて、全然内容を覚えてないから……困ったｏｒｚ

こんな作者ですが、出来れば見捨てないでくださいｍ（＿＿）ｍ

感想をしてくれた武藤さん、ありがとうございます。
書いててゆうひがメインと思われて仕方がないと思いました。予定ではとらハとリリカルから何人かとってハーレムみたいな感じにしようと考えてます。これからも頑張りますのでよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

双ちゃん分は、美肌、ソバカス、染み、老化防止などの多彩な栄養分が含まれてます（嘘）。

## ごた～いめ～ん……可愛ければ無問題！！

あれから1年と2ヶ月ぐらい経ちました。1ヶ月ぐらい前にさざなみ寮から引っ越しして、今はゆうひ母さんと一緒に駅近くのマンションに住み始めた。さざなみ寮での1年間は……あまり思い出したくない。俺の黒歴史だ。その他にも隠れて魔法の修行等もしてるんだけど、1人（リアもいるけど）でやってるとなんか強くなってる実感が湧かないので、これからは管理外世界に行って魔獣とか相手に実践修行をしようかと考えてる。

それと俺も6歳になったので小学校に入学した。勿論、原作と同じ聖祥大付属

なわけがなく、風ヶ丘学園に入学しましたよ。別にリリカルの物語に積極的に介入しようとも考えてないし、私立は金がかかるし母さんにあまり負担もかけたくなかったしな。

今日は日曜なのでたまにはのんびりと家で過ごそうと思ってたら、母さんも休みということで一緒に買い物に出掛けた。

「何か買うの？」

「ん～、そやね～。……特に考えてないね。」

……まあいいけど。

「ならCDショップにちょっと寄りたい。」

取り寄せしたアルバムが来てたはず。

「うちの曲を買ってくれるんやね！！嬉しいで～、双ちゃ～ん。」

「……アイリーンさんのアルバムだよ、買うのは。」

それを聞いた瞬間……沈黙。

「ありがとうございました～」

CDショップで目当てのアルバムを買い母さんの元へ戻った……

……のはいいんだけど……

「……むぅ～。」

拗ねてます。いい大人が拗ねてます。

「……うちの曲は？」

ジト目にになりながら言ってくる。

「買ってないけど……。」

「双ちゃんはうちの事……嫌いなんや。アイリーンのが好きなんや。薄情者～」

なんでさ。っていうか

「母さん……自分のＣＤが出るとき、いつもくれるじゃん。部屋に母さんのは全部あるから買う必要ないし。」

母さんは自分の曲が出たら必ず家に持って帰ってきてくれるから別段買う必要がないのである。

「そうやけど～……じゃあうちｎ「ゆうひ～」ん？」

母さんが何か言う途中に誰かが声を掛けてきた。そちらを見てみると

「ゆうひ～、久しぶり～」

「やっほー。ゆうひ、ご無沙汰～」

長い茶色の髪をポニーテールにしてアホ毛がピョコンと二本でてる美人と腰ぐらいまでの青髪の美人。

「おお～、フィアッセ！？……それとアイリーンやん。」

フィアッセさんの所で明るい感じになりアイリーンさんの所で声のトーンが低くなる。

「なっ、なに？なんか不機嫌ね。私、なにかした？」

そんな母さんに気づいたアイリーンさんが少し戸惑う。

「？？」

フィアッセさんも母さんの態度に？顔。

「…ハァ。フィアッセさん、アイリーンさんお久しぶりです。」

仕方ないので変わりに挨拶する。

「あっ、ソーマ。久しぶり～。」

「やっ、少年。元気にしてたか～。」

２人の返事に首を縦に振りながら事情を説明しようと思うんだが……

「あの……この拗ねてる母さんの事も説明しますけど……場所変えましょう。」

周りの人たちの視線が突き刺さってるんだよね。この人たち有名人だから。そしてフィアッセさん……抱きついてくるのはヤメて、あなたのふくよかな胸が当たって色々……困るから。嬉しいけどね！！『マスター……後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしましょうか』……

……ハイｏｒｚ

「アッハハハ～、そんなことで拗ねてたんだ。」

「あはは、でもゆうひらしいね～。」

今はとある喫茶店で４人で昼御飯を食べている。そして、先刻の母さんの事を説明したら２人は笑った。当の本人は

「ふん。ええやんか。これも双ちゃんが可愛すぎるからあかんのや。」

はい、意味不明です。反論もしたいんだけど……今、俺はそれどころではないのだよ。何故って……それはね……今いる喫茶店が【翠屋】だがらだよ！？何コレ！！管理局の魔王さんとご対面フラグがバンバン立ってる感じがするんだけど！！？

『マスター……フラグ乙です。』

俺と一緒にいたせいかリアが余計な言葉を覚え出してきてしまい初期のリアが懐かしいと思いながら…

『まだだ、まだ諦めはせ「お待たせしましたぁ～」「なのは。お疲れ様～」……オワタ」

リアと念話してる最中に料理を持ってきた店員さんとフィアッセさんの声が聞こえた。……クッ、ならば（ゴソゴソ

「フィアッセ、この女の子とは知り合いなの？」

「うん、この店の家族とは昔からの知り合いなんだ～、ね～、なのは。」

「初めまして。高町なのはです、よろしくお願いします。」

と可愛らしくお辞儀をする高町なのはさん。

「こんにちは。私はアイリーンよ、よろしく。」

「うちは椎名ゆうひです。よろしくな～。」

アイリーンさんと母さんが微笑ましい顔で挨拶をした。……俺は

「……クウネル・サンダースです。よろしく。」

某野菜坊主が主人公の漫画に出てくる変態の名前を名乗った。……付け髭と瓶底メガネ（伊達）を掛けて。

「「「「……」」」」

4人の視線が痛いほど突き刺さる。

沈黙……そして

「なんでやねん（ビシッ。」

母さんのツッコミが炸裂した。

母さんにツッコミをくらった後、高町は店のお手伝いに戻った……
んだけど

「いらっしゃ～い、フィアッセ。」
高町によく似たお姉さんが高町を引き連れて厨房から出てきた。と
いうか桃子さんなんだろうけど……

（この人はあれか。老化というものをどこかに捨ててしまったんだ
ろうか……）
と内心で驚愕していたら視線を感じたのでそちらを見ると……おぅ、
高町さん家の末っ子さんがこちらをロックオン中だ。

「「……」」

2人で見つめ合う。
……まあ知り合いになるぐらいなら問題ないかと思ったので

「……（ニコッ」

「にゃっ！？」

（あれ？赤くなって目を逸らされた。……そんなに気持ち悪かったか……ちょっと凹む。）

表情には出さずに凹んでいると

「あらあら♪」

「少年、やるね～。」

「あはは。」

「双ちゃん。流石～♪」

４名の大人達は微笑ましいものを見た感じになってる。

『マスターは鈍感です』

リアまでなんか言ってくるし。何かしたか俺？。

疑問に思ってると

「あ、あの！！」

高町が声を掛けてきた。

「ん？なに？」

「友達になってくれませんか！？」

と言ってきた。さっきも別に問題ないかと考えてたので

「いいよ、別に。じゃあ改めて、椎名双麻。よろしく、高町。」

「高町なのはです。よろしくお願いします。」

「敬語は別にいいよ～。同い年だと思うし。」

なんか緊張してる高町に気楽に声をかけてあげる。

「……わかったの。よろしくね、双麻くん（ニコッ。私のこともなのはって呼んで。」

可愛らしい笑顔で言ってくる。……ちょっと萌えた。原作見てたけど、やっぱり可愛いなぁ～と思いながら未来では魔王呼ばわりされて不憫だと同時に思った。

大人組はこちらの邪魔をせずに会話してたけど、桃子さんと母さんの会話中に「…女装……」「…写真を……」などの不吉な単語が聞こえたのは……気にしないことにした。

おまけ（後日談

ある日1人で翠屋に行き、マッタリとしてると桃子さんに呼ばれた。

「双麻く～ん、これを着てみて♪」

「……」

ヒラヒラのワンピースを持った桃子さん。後退る俺。

「……サラバ！！（ダッ」（ガシッ

「逃がさないわよ～。」

引き摺られる。

「タスケテーーー（泣」

ズルズルズル……バタン。

この日から翠屋では桃子さんＶＳ双麻の激しい闘いが始まった。……もちろん、双麻の全敗ですが

「……なんで勝てないんだｏｒｚ」

ギャグ補正ですから♪

**ごた～いめ～ん……可愛ければ無問題！！（後書き）**

ふぅ、話を書くのほんとに難しいです。

次回は……時間は少し進みますが、また日常編です。

それと、とらハ側の時間軸が少しおかしいと思われる箇所が出てきちゃいますけどご都合主義ということで勘弁してくださいｍ（＿）ｍ

それでは、また今度

……サンダーブレイクはやはり出した方がいいかな

## 原作までの小ネタ集（前書き）

仕事が忙しくて、なかなか更新ができなくなってきました。

ちょいと亀更新になりますが、できれば見捨てないでください m（

＿＿）m

## 原作までの小ネタ集

◆リアさん人型になる◆

「マスター、前に約束した事をして欲しいのですが。」

「？約束？？……ごめん、なんだっけ？」

「元気になるおまじないです」

「……あれか。けど……どうやって？リングにしたらいいの？」

「いえ。私が人型になりますので。」

「……えっ？なれるの？マジですか？」

「はい、マジです。なのでよろしくお願いします。」

人型になったリアにやってあげました。

なんでそんな機能があるのか聞いてみたけどリアにもわかなかったらしい。

◆修行中◆

ズガァァァァン

「……」

「……」

管理外世界で思いついた魔砲を軽く試したら山が消滅しちゃいました。

「……自重しようか。」

「そうして下さい。」

リアと模擬戦、魔法の訓練の他に魔力制御の訓練も追加した。

◆エンカウント◆

晩御飯の買い物に行く途中駅前を歩いてたら、紫の髪の女の子が泣いて立っていた。
放っとけないので声を掛けた。

「どうしたの？」

「……グスッ、お姉ちゃんが…グスッ、楽しみにしてたチケット、無くしちゃった。」

泣きながら事情を説明してくれた。
要するにこの子のお姉さんが前から楽しみにしてたＳＥＥＮＡ（ゆうひ母さんの芸名）のコンサートチケットを予約したけど、用事が出来て取りにこれない代わりに来た。その帰りにチケットをどこかで無くして途方に暮れてたらしい。
……まあ、泣いてる子をほっとくのもな。
母さんには後日謝ればいいか。

「なぁ、１０分ぐらいここで待っててくれるか？」

「ふぇ？……いいけど。なんで？」

「まあいいから、待ってな」

俺はそう言いながら走って家に戻った。

「ハアハア、あー、しんど。あの女の子は……いた。おーい。」

急いで家に帰りモノを持ち女の子の所に戻り声を掛けた。

「ほら、あげる。」

封筒を女の子に渡した。

「これは？」

「ん？ああ、帰ってから開けてみな。それと、お姉さんにちゃんと事情を説明して謝りな。家族なんだろ？きっと許してくれるはずだから。それともお姉さんは怖い人なのか？」

言いながら頭を撫でる。

「ううん、お姉ちゃんは優しい。……うん、ちゃんと正直に言って謝る。……励ましくれて…ありがと／／」

少しだけ持ち直したかな。

「少し元気になったか。泣いてた顔も可愛いけど、やっぱり笑った顔の方がもっと可愛いぞ。「すずかー」ん？お迎えかな。ほら行きな。」

女の子の背中を押してあげたら、彼女はお姉さんらしき人の所に駆け出し泣きついていった。

「ふぅ。……ヤバッ！？タイムセールの時間が！！」

俺は急いで走り出し買い物に戻った。

後ろで何か言ってたような気がしたけど、今はタイムセールの方が大事だ！！

すずかｓｉｄｅ

あの娘に言われた通りお姉ちゃんに事情を説明して謝った。
そしたら、お姉ちゃんは抱きしめてきて

「すずかの方が大事よ。もう、遅いから心配したじゃない。」

優しい声でそう言ってきた。それが嬉しくてまた泣いた。

なんとか泣き止んでお姉ちゃんと一緒に帰ってる時に、お姉ちゃんが私が持ってる封筒に気づき

「すずか。その封筒は？」

と聞いてきたので、女の子が慰めてくれてこれをくれた事も説明した。

「そっか。その娘にもお礼を言いたいけど……。」

そう言われてあの娘の名前も聞いてない事に気づいた。

「名前……聞くの忘れちゃった……。」

「そう、もし次に会えたらちゃんとお礼をしようか。」

お姉ちゃんの言葉に頷き、お姉ちゃんに封筒を渡した。
お姉ちゃんが中身を見た時、いきなり止まった。??凄い驚いた顔をしてる。疑問に思ったので聞いてみた。

「どうしたの？」

「……プレミアムチケット。これ次のＳＥＥＮＡのコンサートのプレミアムチケットよ。」
と呟いた。
あの娘は凄い物をくれた。

その頃

「どけや！！ババァ！それはオレｎ「うるさいザマス！！喰らうザマス、剛掌波ァァ！」グハッ……まだまだぁ！！」
戦場（タイムセール）でラ王（主婦達）と争っていた。

◆……あるんだ◆

「そういえばマスター。」

リアが唐突に話し掛けてきた。

「何？」

「私には収納機能があるんですけど、中にマスター名義の通帳が入ってます。」

「はっ？何それ？そんなのあったの？」

「はい。言うのを忘れてました。申し訳ありません。」

「いや、いいけど。それって天照さんから？」

通帳なぞこっちに来てから作った覚えがないし。そういえば、母さんの養子になるとき戸籍も何故かあったらしい。神様補正か？※いえ、ご都合主義です。

……何か変な電波を受信したけど、気のせいか。

「ええ。お金も振り込まれてますね。」

「いくら～？」

「日本円で１０００００００００です。」

「……えっ？」

後日、いくつかの銀行に口座を作り、お金を振り分け定期預金をしたり色々奔走しました。

◆高町一家◆

なのはと友達になり家にお邪魔したりして高町家とは良好な関係を築いていた。

高町家にお邪魔していたそんなある日

「双麻く～ん♪」

美由希さんが後ろから抱きついてきた。

「にゃ～～～、お姉ちゃん！ズルいの！？」

「いいじゃん、なのは～。独り占めは良くないよ～。」本人そっちのけでなのはと美由希さんが言い争っている。

美由希さんは初めて会った時は女の子と間違えて可愛いと言いながら抱きついてきたので男ですと訂正したんだけど、それでも会う度に抱きついてくる。曰わく

「なんか双麻くんを抱き締めてると癒やされるんだよね～。」

らしい。……母さんや愛さん、リスティさんみたいに謎の栄養分を摂取してるんだろうか？

ちなみに前になのはが転んで怪我をしたときにおんぶをしたら

「日光浴してるみたいにあったかい感じがするの～。」

と言いそれからなのはも時々抱きついてくるようになった。
そんな事を思い出してたら美由希さんの拘束が緩んだので脱出。「「あっ！？」」２人が油断した隙に庭で盆栽弄りをしてた恭也さんの元へ。

「ん？双麻……なるほど。」

恭也さんは俺に気づいて追いかけてきた２人を見て納得し盆栽弄りに戻った。
２人は恭也さんに気づき諦めリビングに戻っていった。（実はこの恭也さん、とらハの恭也さんみたいに寡黙なのだ……シスコンは変わらないけどな。）
前に同じような事があったとき恭也さんに助けられ２人は少しだけ怒られた。それからは恭也さんの傍にいると２人も大人しくなるので、高町家に来ては恭也さんの周りが避難場所となった。……フィアッセさんには通じないがなｏｒｚ

「……双麻も大変だな。」
盆栽弄りが終わった恭也さんと縁側でお茶を飲み落ち着いていると不意に言われた。

「まあ、嫌われるよりかはいいです。それに母さん達で慣れましたから。」

「そうか……まあ頑張れ。」

「……はい。」

ズズズッ。はぁ、お茶が旨い。

「うぅぅ、お兄ちゃんばっかりズルいの～。」

「恭ちゃん、なのはと双麻くんには甘いなぁ～。」

◆姉妹喧嘩◆

「……#」

「……#」

さざなみ寮にいます。

ただ……現在、空気が痛いです。重いじゃなく、痛いです。

その空気を作り出してる2人、リスティさんと妹のフィリスさんが睨み合ってます。

そもなんでこんな状況になってるかと言うと……めちゃくだらない事です。

寮に遊びに来た俺。

リスティさんは仕事が休みで縁側で休んでいた。
俺を見つけ捕獲して膝の上に乗せてまったりしていた。
リスティさん煙草を吸い始める。
そこに、偶然にも仕事が休みで寮に訪れたフィリスさんがリスティさんを見て、俺を見て、リスティさんに注意。
リスティさんはそれをあしらう。
フィリスさん更に注意する。
ちょっとイラっときたのかリスティさん文句を言う。
フィリスさんもそれにカチンときたのか更に激怒。
両者、口撃し始める。
徐々に苛烈。
そして今に至る。

……ほんとにくだらなさ過ぎる。

ちなみに寮のお姉さま方はリビングに入った途端、回れ右。管理人の耕助さんは「やるなら外でやれ～」と平然↑マジパネェっす。

「リスティ！！いい加減に双麻くんを離しなさい！！」

「イヤだね。ソウマも別に嫌がってないし、フィリスの言うことを聞く謂われはないね。」

「#双麻くんはいい子だから何も言わないの！それに煙草を吸ってたら双麻くんの健康に悪いでしょ！！」

「ソウマの周りには念動力でいかないようにしてる。問題ない。……もしかして、羨ましいのか？自分も双麻を抱っこしたいとか？８歳児が色気づいちゃってまあ。」

「……＃＃＃＃。もう怒った！？今日という今日は絶対に許さないから！」

「お姉ちゃんに適うとでも？返り討ちにしてやる。」

お互い庭に出て、トライウィングスを展開。俺はいまだリスティさんに抱えられている。逃げようとしてもリスティさんが念動で拘束してるから無理……別にやってもいいけど、巻き込むのは勘弁ｏｒｚ

「「サンダーブレェィィィィク！！！！！」」

姉妹喧嘩という苛烈な争いは帰ってきた愛さんと迎えにきたゆうひ母さんが来るまで続いた。

２人はこっぴどく怒られていた。

……何故か俺まで怒られた（Ｔ＿Ｔ）

## 原作までの小ネタ集（後書き）

……

……すいませんm（＿）m

長々と書くのはアレかなと思い纏めちゃいました。

**原作……知るかバカ！んな事より戦争（タイムセール）だ！！（前書き）**

連続投稿

**原作……知るかバカ！んな事より戦争（タイムセール）だ！！**

お久しぶりです皆様。
時は進んで私こと椎名双麻は小学三年生になり今は授業中です。
少し前にリアが海鳴市に多数の魔力物質が降ってきたと教えてくれました。
十中八九ジュエルシードです。
ちなみに俺はリアに頼んでリミットを掛け魔力を０に抑えているのでユーノの救援信号なんざ受け取っちゃいません。

『マスター。ジュエルシードはどうするんですか？』

『別にどうもしない。降りかかる火の粉は払うけど、わざわざ火の元に近づいていくような事はしないよ。』

『なのは嬢を助けたりは？』

『大丈夫……だと思う。』

リアの言葉に少しだけなのはを心配した……。
なのはとは疎遠になったりとかはなく、いまだに仲良くやってる。
流石に毎日会ったりとかはせずに１週間の間に１、２回会ったりするぐらいだけど。

『……本気で危なかったらコッソリと助ける。』

『……流行りのツンデレですか？まあそんなマスターも素敵ですが。』

リアも随分と変わっちゃったなぁとしみじみ思った。

放課後、学校帰りにテクテク歩いてる最中にリアが唐突に念話してきた。

『マスター。近くに魔力反応です。』

……はっ？

『どこ？』

『そこの電信柱の影です。』

言われて覗いてみると……青く光る石があった。

『……飛行石？』

『ラピュタは本当にあったんだ……ではなく、ジュエルシードですね。』

リアが珍しくノってくれた。

そういえば以前にジ〇リ作品を見てたな……いや、それは置いといて。

『ナンバーは？』

『ＸＶＩＩですね。原作では確か省略されてた石です。』
そうだっけ？と思うと同時に……これは巻き込まれるフラグか？
無視……はしたらマズいかなぁ？
もし普通の人が拾ったら危ないだろうなぁと考えてたらリアが進言してきた。
『マスター、流石に封印処理して回収した方が……。』
『やっぱり？……仕方ないかぁ。リアお願い。』
『ｙｅｓ。』
リアに封印してもらいジュエルシードを回収しておいた。
（頃合をみて適当になのはの前に転がしておくかぁ）
そんな事を考えながら帰路についた。

その日の夜中、大きな魔力を感知した。
なのはが魔法少女になったみたいだ。

（そういえば……最初の場所って……動物病院だよな……あれって愛さんの所で、壊れた場所も直してなかったような……）
思い出して、愛さんが落ち込むのは見たくないなぁと思い現場に向

かった。

病院に着くとなのは達が丁度退却していく所だった。

「うわぁ～、これはまた。派手に壊れてるなぁ」

周囲の惨状を見て、そう呟いた。

「マスター、後2分程で警察が来ます。お早めに」

「了解。じゃあやりますか。」

俺は少しだけ魔力を解放し回帰魔法をかけた。
回帰魔法はリア曰わく遥か昔に失われた文明にあったそうでリアは勿論それを知ってるので使用できる。
俺は便宜上クロノ式と名付けた。
ものの３０秒ほどで病院の壊れた箇所が戻り、それを確認して俺も転移し自分の部屋に戻った。

数日後、またしても魔力反応を感知し次は神社の方面だったので知らんぷりをした。
というか、今日はそんなのより高級肉が特売で３割引きなのだ。これは見逃せない。

「ババァ！！今日こそ引導を渡してやらぁ！！くらえ！」

「甘いザマス！！無想転生！」

「グハァッ」

『ケーーーーン！』

「ウオォォォォォ！！」

ラ王（主婦）の攻撃を食らい崩れ落ちたがリン（リア）のお助けで復活！？バトルボーナス、継続！！
まだ、終わらんよ！！

今日も海鳴のタイムセールは熱かった。
というか、あの主婦強ぇｏｒｚ

余談だが、高級肉はなんとか手に入れた。

その夜、海鳴市に金色の少女が舞い降りた。

## 原作……知るかバカ！んな事より戦争（タイムセール）だ！！（後書き）

最後のネタはわかる人にはわかる。

ちなみに作者はよくパンチで殺され、剛掌波はかわしたり立ち上がったりよくしました。

友人曰わく、なんかおかしいだろって突っ込まれました。

最高連チャンは緑オーラの７揃いで７３回です。

なんか物語よりネタ話の方がポンポン浮かんで役に立たない今日このごろ。

## 金髪幼女……お持ち帰りぃぃぃぃ（前書き）

倍プッシュだ！

駄文です。

**金髪幼女……お持ち帰りぃぃぃぃ**

「えっとね、それ……集めてるから渡して欲しいんだけど。」

目の前にいる金髪で赤い目をした美少女が話しかけてきた。

ええ、そうです。フェイトさんです。……なんか子犬チックで可愛いんですけど。

今、何気に公園で向かい合ってるんですよね。

なんでこうなっているかというと

◆少し時を遡り◆

今日も今日とて平穏に学校の授業を受けて帰宅中、海鳴商店街にある本屋に寄り道をしていたらリアが

『マスター』

と声を掛けてきた。

『……聞いたらイヤな予感するから聞きたくないんだけど』

『残念ながら少々マズいです。ジュエルシードですが、魔力反応が

少し増大してます。できるなら、封印処理を早めにしたほうがよろしいかと。』

なーんて事を言ってきた。

『……わかったよ。やればいいんでしょ、やれば。ハァ、なんか着実に巻き込まれていってるな。』

リアに愚痴を言いながら言われた場所、路地裏を覗くと見つけた。

少し人目につくかなと思い、場所を移動しようと思い振り返ると

「あ、あの！！」

金髪美少女フェイト・テスタロッサがいて声を掛けられた。

「あの、あなたが持ってる石なんだけど。」

続けて話そうとするフェイト。だが

「ちょい待って。場所を変えたいんだけど。流石にここは辛気臭くて早く出たい。」

こんな暗い路地裏からは早く退散したいので、そう提案しフェイトもそう思ったのか頷いて一緒に出て、落ち着いて話せる場所に向かった。

そして冒頭に戻る。

「で、この石が欲しいんだっけ？」

フェイトに聞く。

「うん。ある人に頼まれてそれを集めてるんだ。だから、譲ってほしい。」

こちらを見ながら話すフェイト。

少しフェイトを観察してみると……原作でもなのはが言ってたけど、なんというか確かに瞳が少し昏い感じだな。

そんな事を考えていたら、無言だったためフェイトがオドオドして上目遣いをしながら

「ダ、ダメ…かな。」

と聞いてきた。

……

…テイクアウト、ＯＫ？

『いや、ダメでしょうマスター。……気持ちはわかりますが。』

リアにツッコまれたけど、気持ちは同じみたいだ。流石、我がパートナー。

更に無言でいると、更にオドオドして徐々に涙目。……可愛いすぐる。

『マスター、さすがに…』とリアに窘められたので

「ごめんごめん。ちょっと考え事してたから。それでコレだよね。
別にいいよ、上げる。はい。」
謝りながらフェイトに手渡す。
あっさりと渡され困惑してジュエルシードと俺を交互にみる。
「ん？いらない？なら…「いる！！」…そう。」
いらないの言葉にめちゃくちゃ反応したし。フェイトは
「あ、ありがとう。」
とお礼をいってきたので、どう致しましてと返した。
その時
グゥゥ～
と何かが唸る音が聞こえた。音源の方を見ると
フェイトが真っ赤になりながらお腹を押さえていた。
それを見て思い出した。
（確か、フェイトの食生活って……悲惨だったよな。って今更だけどアルフは……別行動か？…まあいいや）
周りを見るとたこ焼きの屋台が離れた所に見えた。

「ちょっと待ってな。」

声をかけ屋台に向かった。

フェイトｓｉｄｅ

母さんに頼まれてジュエルシードを見つけるため管理外世界のこの町にきて数日。

アルフと別行動して探してたら、少しだけ魔力を感知したので急いで向かったら肩口まで伸ばしてある黒髪の可愛い（少しだけ凛々しい）女の子がジュエルシードを拾っていた。

アレを持っていかれたら困るから思い切って声をかけ譲ってもらうようにお願いしようとしたら、止められ場所を移動した。

結構広い公園に着いたので改めてお願いしてみたら女の子は黙ったまま。

（あぅ、いきなり譲ってなんていったから怒ってるのかな……でも、母さんに頼まれたんだから……もし譲ってくれないなら）

頭の中で最終的には魔法を使って奪おうかと考えてたら

「ごめんごめん。ちょっと考え事してたから。それでコレだよね。別にいいよ、上げる。はい。」

と言ってあっさりと渡してくれた。

ちょっと信じられなくて女の子とジュエルシードをチラチラ見てたら

「ん？いらない？なら…「いる！！」…そう。」

うぅ、いらないって言葉に思わず反応しちゃって大声出しちゃった。

恥ずかしい。

けど、やっと1個手に入れた。それで気が弛んじゃったのか

グゥゥ～

……はぅ！！

お腹が鳴っちゃった！？

慌ててお腹を押さえるけど……聞こえちゃった…よね？

チラッとその子を見ると周りを見て

「ちょっと待ってな。」

そう言って走り出していった。

少し待ってたら手に何かを持って戻ってきた。

「はい、これ。熱いから気をつけな。」

渡された物をみて、中を開けると丸い食べ物が湯気を立てて並んでいた。

「これは？」

聞いてみた。

「たこ焼きだよ。知らないか？美味しいぞ。俺の好物の一つだ。」

そう教えてくれた。

その子は美味しそうに食べていたから、私も食べてみる。

「熱っ！……熱い……うぅ。」

「気をつけなって言っただろ、ほら。飲み物。」

そう言いながら冷えたお茶を渡されたので、飲む。

「…ンク。……ん、熱いけど……美味しい。」

「だろ。……ようやく笑ったなぁ。」

言われて気づいた。

いつの間にか…私、笑ってた。

すると頭に何か乗ったので見るとその子の手だった。

……撫でられてる。なんで？と思い、見上げると

「やっぱり笑った方が可愛いな。せっかくの美少女が暗い顔をしてたら台無しだぞ～。」

（か、可愛いって／／／美少女……／／あぅ。）

言われた言葉を理解したら顔が熱くなってきた。きっと、真っ赤になってる。

照れてる私の額にまた何か感触が

（……へっ？……今のって？）

今の出来事を理解しようと思考を巡らしてると

「元気になるおまじないだ。やったらみんな結構元気になってるから一応効果はあるんじゃないかと思うぞ。」

と言ってきた。

（……キスされた！！！…あっ…けど女の子だし……額だし……でも恥ずかしいのは変わりないよぅ／／）

なんとか私は持ち直しご馳走になったことや…お、おまじない／／の事も含めお礼を言った。

「色々とありがとう。……私はフェイト、フェイト・テスタロッサです。もし、また次に会えたらちゃんとお返しします。」

「あんまり気にすんなよ。こっちが勝手にやっただけだし。後、俺の名前は双麻、椎名　双麻。よろしくな、フェイト…でいいか？」

「うん、いいよ。私も双麻って呼ぶね。……男の子みたいな名前なんだね。」

双麻の名前を聞き思ったことを口に出したら

「……いや、俺…男だからな。」

と言った。

……男？えっ？じゃあ、さっき

……男の子に……キス…された？

……キュウ～

意識が遠くなる瞬間、アルフの声が聞こえたような気がした。

side end

フェイトがいきなり倒れかかったので慌てて受け止めたら

「フェイトに何すんだーー！！」

後ろから大きな声で叫ぶ女性、アルフが登場した。

「あんた！？フェイトに何したんだい！

場合によっちゃ、ただじゃおかないよ！！！」

激昂するアルフ。

「してないから。ちゃんと説明するから落ち着いてくれ。」

「……ほんとだね？」
疑わしい目で見、警戒しながらフェイトを受け取る。

――説明中

事情を話したらアルフは警戒を緩め
「そうかい。フェイトがお世話になったね。」
と言ってきた。
「いや、勝手にやったことだしな。ただ…なんで倒れたかはわかんないけど。……貧血かな？」
ほんとになんで倒れたんだか…俺が男とわかっていきなり倒れた……驚愕のあまりか？
疑問に思ってるとアルフは呆れた視線を向けてきて
「あんた……わかってないんだね。……まあいいや。あたしらはもう帰るよ。双麻だっけ？あんたも暗くなってきたから帰りな。」
アルフに言われ既に6時過ぎてることに気づき、俺も帰ることにした。
「そうだな。フェイトにちゃんとご飯たべろよって伝えてくれ。じ

ゃあ、またな～。」

別れを告げ、公園を去っていった。

帰る途中

『マスター、帰ったら少しだけＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしましょうか』

なんでさ！？

おまけ

高町家

「にゃ！？」

「どうしたの？なのは？」

「双くんが浮気してる感じがしたの」

「なのは……大丈夫？」

恭也（双麻も大変だな）

ある場所にて

「むっ！？」

「どうしたの？ゆうひ？」

「双ちゃんが浮気したような感じが…後……強大な敵が現れた感じも。」

「ゆうひ……いや、なんでもないわ（少年も大変ね～）。」

**金髪幼女……お持ち帰りぃぃぃぃ（後書き）**

チロリ～ン

フェイトにフラグを建てました。

**ラ王……半端ねぇ（汗（前書き）**

刮目してみよ！？

これが

最強の技だーーーー

**ラ王……半端ねぇ（汗**

フェイトに遭遇した後日、ふと思った。

「リア～、フェイトってこの時期に来たっけ？確か、町中でジュエルシードが発動しなのはが解決した後に来たような記憶があるんだけど……」

「……私の知ってる事はマスターの記憶と共有してますから、その点に関しては同じと答えます。なので……少しズレが起きてるのは確かです。」

リアも同じ意見みたいだ。

「ん～、じゃあ近く起こるジュエルシードの件にフェイトが来る場合があるかな……。」

「……どうしますか？」

「まあ、あの件はなのはが少し現実を見直すのに必要だから…フェイトが関わろうとしたら少し妨害しよう。」

「わかりました。」

リアと簡単に作戦を決めその日は少し鍛錬をして終わった。

土曜日の深夜、ジュエルシードの発動を感知したので離れた所で見

ていた。
そこには予想通りの光景が繰り広げられており、なのはが封印をしようと頑張っていた。
『リア。フェイトが近づいたらすぐに教えて。』
『ｙｅｓ』
念話でやり取りしていたら、なのはが意外に苦戦していた。
（……やっぱり。少し原作と違うな結界も張られてるし。……しゃーない遠距離から少し援護をするか）
そんな事を思い、ハーディスを出しタイミングを伺っていると
「夜中にウルッサイザマスヨ――――――――――――――――！！！静かに寝かせろザマス！！」
いきなり民家の窓が開き、見たことのあるオバハンが現れ叫びだした。
「……はっ？」
「……主婦のようですね」
呆気にとられる俺。
冷静に把握するリア。
なのは達は結界内に一般人がいた事に驚いていた。（俺は結界の一

部を気づかれないように破り侵入している）

だが、更なる驚愕をオバハンは起こす。

「木の分際でアタシの睡眠の邪魔をするなザマス！！右に剛掌波、左に剛掌波。……合成！！喰らうザマス！天昇剛龍波ァ――――。」

オバハンが凄まじい気を合わせて巨木に向かって放つと龍の形を取った気が巨木を喰らい天に昇り結界を突き破り完膚なきまでに巨木を消滅させた。

「ふん、これでゆっくり眠れるザマス。」

ピシャッと窓を閉めオバハンは消えた。

後に残るは無惨な街並みと呆然とするなのは組と俺達。

なのは達はすぐに我に戻りジュエルシードを封印した後、街並みを見て泣きそうな顔をした。だけど、少しして立ち直り2人の男女を介抱し戻っていった。

俺とリアはいまだに呆然。

「……あのさ。この惨状って明らかにあのオバハンが大半だよね。」

「……そうですね。明らかに巨木が起こした被害よりあの主婦が起こした被害の方が大きいです。」

「……なのはが現実を理解して成長したのはいいけど……罪悪感を感じる必要は皆無だよ。」

「なのは嬢は良い子ですから……可哀想ですけど。」

「「はあ。」」

リアと同時に溜め息を付き帰宅した。

「あっ。そういやフェイトはどうしたんだろ？」

「主婦の放った技が結界を突き破った際に巻き込まれてましたよ。」

……フェイト、君の事は忘れない。

「いえ、死んでませんから。生体反応は確認できてます。」

その頃

「フェイトー、しっかりしてーー（泣」

「キュゥ〜〜」

アルフの叫びが深夜の空に木霊した。

おまけ

「リア……今朝の新聞に昨日の惨状の事が載ってる。」

「そうなんですか？それで？」

「あのオバハンを加害者で逮捕しようとして警官隊１００人導入。……だけど、反撃にあい全員撃破、オバハンはそのまま首相官邸を襲撃。その後、何故か逮捕状は取り下げられたみたい。」

「……地上最強の生物ですか。」

「……今日…タイムセールあるんだけど。」

「……勝てますか？」

「……無理ｏｒｚ」

## ラ王……半端ねぇ（汗（後書き）

……反省はしてる。

後悔は……少ししてます。

眠気と戦い、少しテンションがおかしくなって投稿しちゃった。テヘッ☆

光輝さん、感想ありがとうございます。

知佳ぼーは……そうですね～、ハーレム入りは厳しいかもです。

まだわかりませんけどね。

ただ番外みたいな感じのネタ話で出します。

もしかしたら、構成にあるオリ話で出る可能性もなきにしもあらず。

まあ、今後ともこの駄作で楽しんでいただけたら幸いです。

m（＿＿）m

武藤さんいつも感想ありがとうございます。

主婦で経験値稼ぎ……アリと思います！？

**月村邸……俺は犬も好きだが猫も好きだ！！（前書き）**

少し駆け足で書いたのでおかしい部分があります。

相変わらずの駄文ですが、よろしくお願いします。

**月村邸……俺は犬も好きだが猫も好きだ！！**

今日はなのはに連れられて月村邸に行くことになりました。

最初は向こうに迷惑だし、会った事もない野郎が訪れるのも嫌だろうからと断ってたら恭也さんが

「忍…向こうの家主に聞いたらＯＫだと」

という援護射撃をくらい仕方なく了承した。

そして月村邸に着いた。

……すごく……大きいです（汗。

あまりに広い屋敷に呆然としてたら

「双麻くん、ほら行こう。」

なのはに腕を取られ歩く。ちらっと恭也さんに目を向けた。

「まあ、この家を見たら初めての人はたいていそういう反応だ。家主とかは気さくなやつだからあまり緊張するな。」

と頭にポンと手を置き言ってくれた。

『マスターも買おうと思えば買えるじゃないですか。』

リアはこんなことを言うが、こんなに広かったら逆に困るからな。

そう思い玄関前につくとおもむろにドアが開き、中からショートカットの綺麗なメイドさんが現れた。

「いらっしゃいませ。恭也様、なのは様……そちらがお伺いしておりました椎名様でしょうか？」

「ああ。双麻、こちらはこの家のメイド長のノエルだ。」

「初めまして。椎名　双麻です。今日はよろしくお願いします。」

やや緊張しながらお辞儀をして挨拶をした。

「はい、よろしくお願いします。私はノエル・K・エーデリヒカイトと申します。本日はごゆっくりとお過ごし下さい。」

と楚々とお辞儀をするノエルさん。それに見とれてると

「ァイタ！？」

なのはに脇腹を抓られた。

抗議の目を向けるとフンとした顔で明後日の方向を向く。

そんな俺達をみて苦笑する恭也さんが早く入るぞと促し、俺達もノエルさんの案内に従い歩いていく。

（マスターはメイドが好き……なんですかね。ならば…）

リアが何か呟いた気がしたけど、気のせいか？
後、何気に恭也さんの肩にユーノがいた。

ノエルさんに案内され広間の前に着いた。ノエルさんがドアをノックし

「ノエルです。恭也様達がお着きになられました。」

「は～い、入ってきていいよ～」

ノエルさんの言葉に返答があった。

（ん？なんかどっかで聞いたような……？）

その声に首を傾げながら中に入っていく恭也さんとなのはに続いていく。
中に入ると部屋に音楽が流れ（母さんのバラードだ）多数の猫が遊んでる姿と奥にはテーブルでお茶をしてるウェーブのかかった金髪ツンデレ美少女と紫の髪にヘアバンドをしている美少女、アリサ・バニングスと月村すずか、その側にもう1人メイドさんがいた。3人を見て
（あれが…クギュ～と名高いツンデレとドジっ娘メイドのファリンさん……で、あれが月村すずかなんだけど……やっぱどっかで見たような？）
すずかの方を見てアニメじゃなくこの世界に来てから会ったような気がして考える。そうすると向こうは俺を見て目を丸くして驚いていた。

なんだ？何か俺は変な格好でもしてるのか？と思ってると

「あの！？あの時はどうもありがとう！！」

いきなりお礼を言われた。そんなすずかの様子にアリサと恭也さんノエルさんとなのはは？顔、ユーノは床に降り首が痒いのか後ろ足で掻いていた。（死ね、淫獣）。

俺は何かが引っかかって首を傾げる。そこにリアが念話で教えてくれた。

『半年ぐらい前にマスターがチケットをあげた子ですよ』

そう言われればそんな事があった。あの後に強敵と戦い、更に後日コンサートに行けなかった事で母さんが拗ねまくった事があり、どんな子にあげたかなんてすっかり忘れてたわ。

「ああ、あの時の。ちゃんとお姉さんに謝った？」

と聞くと

「うん、お姉ちゃんはちゃんと許してくれた。それより貰ったチケットを見て驚いたんだけど、あれってあなたも行くはずだったんでしょ？ほんとに良かったの？」

申し訳ないような顔をして聞いてくる。母さんは確かに拗ねて怒ったけど、事情を説明したら笑って「双ちゃんらしいな～」と言い許してくれた。

「別にいｉ「ちょっと！？２人で話してないで私達にも説明しなさ

いよ！」…だって。」

アリサが痺れを切らしたのか話に割り込み説明を求めてきた。
なのはも「説明してよ～」みたいな顔をしてて、恭也さんも少しだけ気になってる様子、ノエルさんとファリンさんも自分達の主がお礼を言ってるので俺に対し少し畏まっているみたい。

「とりあえず自己紹介がてら説明しようか。」

すずかもその言葉に頷き説明と自己紹介を始めた。
余談だけど、俺が自己紹介した時に男だと言ったら恭也さんとなのはとノエルさん以外は驚いた。ノエルさんは名前から察していたみたい。

「というわけだよアリサちゃん。だから双麻くんにお礼を言ったの。」

「へぇ～、ＳＥＥＮＡのチケットをね。あんた、やるわね～。ＳＥＥＮＡのチケットってなかなか手に入らないんでしょ。」

なんか見直したような顔しながら言ってくるアリサ。初対面だから見直すも何もないがな。
恭也さんは納得顔、なのはは「にゃはは」と苦笑顔。
高町一家は俺の母さんについて知ってるからな。口止めをお願いし

てるからバレることはない。

「あのね、アリサちゃん。ただのチケットじゃなくて、プレミアムチケットだったから余計に申し訳なくて。」

「はっ？プレミアムって……あんたバカなのか大物かのどっちかね。あれって宝くじ並みに手に入れるのが困難なんでしょ。よく見ず知らずの人にあげたわね。」

となかなか失礼な事を仰るクギュだ。

「別に俺があげても問題ないと思ったからあげただけ。それにさっきお礼も言って貰ったし。」

そう答えた。

隣に座ってるなのはが聞いてきた。

「（ゆうひさんは大丈夫だったの？）」

「（最初は拗ねまくってたけど、説明したら機嫌直った。）」

なのはとボソボソと会話してると

「お姉ちゃんももうすぐ来るから。お姉ちゃんもお礼をしたいって言ってたよ。」

すずかがそう言うと同時に部屋の扉が開き、噂の人、月村　忍さんが入ってきた。

忍さんは恭也さんを見て

「恭也〜♪」

と可愛い声を出し恭也さんに抱きついていった。

「忍、落ち着け。」

「お姉ちゃん！？初めての人もいるんだよ！」

と2人で窘めていた。

「……いつもこんな感じなの？」

なのはとアリサに聞く。

「大体そうね。」

「そうだね、お兄ちゃんがいるとこんな感じなの。」

2人の返答にそうか〜と思い、ノエルさんが淹れてくれた紅茶を飲む。……紅茶、激うめぇ。

忍さんが落ち着き、すずかに俺の事を聞いて、こっちに近付いてきた。

「初めまして。この家の当主である月村　忍です。その節はすずか

がお世話になり迷惑をかけてごめんなさい。それとありがとう。」
「初めまして。椎名　双麻です。それと迷惑とは思ってないですから。それより、コンサートを楽しんでくれた方があげた甲斐もあるんですけど、どうでした？」
忍さんに聞くと
「「すっっっっっっっっっっごく良かった（よ）！！！」」
すずかも声を揃えて叫んだ。それから、母さんの歌のどこがいいとかあれがよかったとか母さんがすごい綺麗だとか熱心に語ってくれた。
まあ、２人が母さんの物凄いファンというのは理解した。
ただ、２人が言った
「はぁ、ＳＥＥＮＡのプライベートはきっと優雅なんだろうなぁ。」
↑忍さん
「そうだよね～。テラスで紅茶を静かに飲む姿が目に浮かぶよね～。」↑すずか
それを聞き
「ブフォッ」
『クッ、プッ』
俺は飲んでた紅茶を吹いた。
リアは念話だけど吹いた。

「「「？？？」」」

恭也さんとなのはは察して、他は俺を見て「どうした？」みたいな顔をしてる。

「……プッ…い、いえ……な、なんでもないです。ただの……思い出し…クッ……笑いです……。」

『アハハハハッ、マスター。ダメです。耐えれません。ゆうひが優雅に……アハハハハッ』

リアは盛大に笑う。

正直、俺も爆笑したいけどここは我慢だ。

しかし……母さんが…紅茶……プッ、ダメだ！思い出しちゃダメだ……これは今年一番の笑い話だ

なんとか俺も落ち着いて会話を再開し、忍さんと恭也さんは退室して今は子供組だけで、俺は猫と遊んでる。というか、猫たちは飼い主のすずかそっちのけで俺の周りでゴロゴロ昼寝をしたり乗っかってきたりしてる。

猫たちの様子にすずかとアリサは少し驚き、なのはは何か「ネコちゃん達の気持ちはわかるの」とか言ってる。

俺もネコは好きなので満悦だ。
するとなのはが何かに気づき傍らにいたユーノが庭の方を見て駆け出した。
「あっ！…ユーノくんを探してくるね。」
そう言うなのはにアリサはついて行こうかと尋ねたけど
「大丈夫、すぐに戻ってくるから。」
と言い出て行った。

『マスター、今回は……』
『大丈夫だろ。下手に出て行くと何があるかわかんないし』
リアと念話をして不干渉と決めた。

すずかとアリサの2人と談笑していたらなのはが遅いと言うので、
俺が迎えに行くといい庭に出た。
『なのはの位置は？』

『このまま真っ直ぐ行くといます。』

リアの先導に従い行くとユーノがキューキュー言いながらこっちに向かってきた。
俺を見つけるとついてこいと言わんばかりにまた奥に入っていった。
なのはを見つけると意識を失っていたので、おんぶをして月村邸に戻った。

なのはｓｉｄｅ

ジュエルシードの反応がしたから向かうと大きな猫さんがいた。
ユーノくんに言われ封印しようとすると突然、黄色い閃光が飛んできて猫さんに当たり爆発した。
飛んできた方向を見るとそこには悲しい瞳をした金の髪を両サイドでくくった女の子がいた。

「申し訳ないけど、それを頂いていきます。」

そう言い私に向かって攻撃してきた。

咄嗟にバリアを張り彼女の攻撃を凌ぐ。

「クッ！？」

後ろに退がり私の方を見ながら警戒している。
ユーノくんが私の傍にきて

「なのは、気をつけて。同じ魔導師だけど向こうは訓練されてる。」

「うん。わかったの。」

ユーノくんの言葉を聞き女の子の方へ向き聞いてみた。

「なんでいきなり攻撃するの？」

「……」

問いかけに答えてくれずにこっちにまた攻撃を仕掛けてくる。
防御をして反撃しようとすると

「フェイトー！！」

横から声が聞こえそちらに気を取られ攻撃を受けた。

「にゃっ！？」

バリアを張ったけど衝撃がきて少し頭がクラクラした。

「あれは使い魔？」

ユーノくんが犬さん？を見て呟いた。

「アルフ。ここは任せたよ。私はジュエルシードを」

「了解。」

女の子と犬さん?が何かを話し終えると女の子の方はジュエルシードへ飛んでいった。

「ちょっと待っ「あんたの相手はこっちだよ。」…!?」

犬さん?が凄い速さでこっちへと攻撃してきた。
またバリアを張ったけど少し遅かったため吹き飛ばされた。

「なのはっ!?」

「にゃーっ」

「アルフ!回収したよ。」

「わかったよ。長居は無用だね。」

女の子と犬さん?が去り、私は緊張が途切れたのかペタンと座り込み頭がフラフラしてきた。

「なのは!?クッ、待ってて人を連れてくるから!」

ユーノくんの言葉を聞き私は意識を手放した。

（ん、暖かい……それにいい匂い…この感じは…双麻くん？）

目を開けると誰かの背中が視界に写った。一瞬、わからなかったけどすぐにわかった。

（えへへっ。双麻くんあったかいの。）

双麻くんの背中にギュッとしがみつきあの女の子の事を考えた。

（悲しい瞳をしてた……次に会ったらちゃんとお話を聞かせてもらうの！？）

そう決意しながら双麻くんの背中を堪能した。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

おぶってるなのはがギュッとしがみついてきたから意識が戻ったかなと思ったけど、そのままにしておいた。

なのはを連れて戻ると恭也さん達もいて、なのはの様子を聞いてきたので転んで頭でも打ったと思うと答え、怪我とかは無いことも伝えた。

それで、今日はお茶会はお開きになりそれぞれ帰路に着いた。

「マスター、なのは嬢の事は良かったのですか？」

1人になった頃合をみてリアが聞いてきた。

「まあ、心配といえば心配だけど…魔法に関わるならもっと危険な目に会う事もあるし。酷いように思うけどここは静観しよう……見てられない場合は助けるけど（ボソッ」

「……クスッ、マスターの仰せのままに」

リアに見透かされ恥ずかしい思いをしながら家に着いた。

おまけ

「アッハハハハッ」

「耕助さん……笑っちゃ悪いですよ……プッ、アハハ」

「ハハハハハッ、ゆうひが…優雅に……お茶……アハハハハハハハッ」

「もう皆～、ゆうひお姉ちゃんに悪いよ～……プッ」

「知佳～、おまえもほんとは爆笑したいんだろ～。ちなみに私は笑

う。ハッハハハハハッ」

「……クッ、クスッアハハッ」

上から耕助さん、愛さん、リスティさん、知佳さん、真雪さん、薫さん。

そして

「なんやなんや！皆してそんなに笑うことないやんか！？うちだって紅茶ぐらい優雅に飲むわ。」

抗議するゆうひ母さん。

今日は知佳さんと薫さんが寮にきてると連絡を受け、母さんもオフだったため一緒に訪れた。（ちなみに知佳さんと薫さんとは面識がある）

最初はみんなでワイワイ会話に花を咲かせてたらリスティさんが俺を抱えながら最近面白いことはあったかと聞かれたので、月村邸での出来事を話した。

それを聞いた母さんがどや顔で

「わかる子にはわかるんやな。ほら、優雅にお茶を飲んだろ。」

ってな感じで調子に乗りお茶を飲み始めた。

みなさん、沈黙。

そして、大爆笑!?
冒頭に至る。
はぁ～、今日もお茶が旨い。
「こら～、双ちゃんが振った話題でこんなんなったんやで～!?」
俺に怒り出す母さん。
リスティさんから離れ、母さんから離れてる知佳さんの方へ避難。
「知佳さん、母さんをお願いします。」
「ええ!?えと、ゆうひお姉ちゃん落ち着いて……プッ。」
知佳さんはなんとか宥めようとしたけど、母さんを見てさっきの話を思い出し吹いた。
「ち～か～ちゃ～ん～」
「あっ!?ごめん、ゆうひお姉ちゃん。ひゃあ、や～め～て～（泣笑」
母さんは報復に知佳さんの体を揉みまくっている。
「ご愁傷様です、知佳さん」
冥福を祈っておく。
「いや、双麻くん。君のせいだから。」

薫さんにツッコマれた。
今は薫さんの傍にいる。
「大丈夫です。母さんも満足したら次に行きます。」
「次って……まさか（汗。」
俺の言葉にハッとなる薫さん。だけど、少し遅かったです。
「か～お～る～ちゃ～ん」
既に母さんはあなたをロックオンです。
「きゃあ！？椎名さん、やめっ。そこは…ほんとにダメです。どこを触ってるんですかー！？」
母さんが飛びつき薫さんの体を揉みまくっているんだけど……。
母さんも、ん？てな顔をして
「薫ちゃん、うちはまだ肩口あたりまでしか触ってへんよ？」
と言った。
「えっ？でも、さっき胸とお尻を……ひゃあ！？」
母さんが触るのを止めたのにまた誰かに触られて思わず可愛い悲鳴を上げた薫さん。
後ろを向いたら

「おーおー、立派に成長しちゃって、まあ。……あっ」

真雪さんだった。

「……仁村さん#」

「アハハ、いやぁ～。あれから、どれぐらい成長したか気になってなぁ。……それより神咲……まだ処女だろ。」

真雪さんは平然と爆弾を落とした。

「……（ブルブル。な、なぁ、なんばいいよっとですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ##。」

始まるリアル剣戟。

さざなみ寮は今日も平和です。

「双ちゃ～ん。なんか忘れてへん……かなぁ#」

……ギニャァァァァァ

後日

フィアッセさんとアイリーンさんが遊びに来たときに話してあげたら

「アッハハハハ、ゆうひが…テラスで……アハハハハッ」

「アハハハハハ、ゲホッ、ハハハハハ、お腹痛いわ～。少年、ナイス～、アハハハハッ」

2人も勿論、大爆笑。

「みんなしてなんなんや～～～～～！！？」

母さんの怒声が海鳴の空に響き渡った。

おわり

**月村邸……俺は犬も好きだが猫も好きだ！！（後書き）**

とらハ2では作者は薫さんが大好きです。
3の時の薫さんを見たときなんて、思わず悶えました。

2のエンディング時の知佳ぼーも大好きです。

ぶっちゃけ言ってしまえばとらハのキャラほぼ全員好きです。

ただ流石に全キャラは出せません。（力量不足のため）

おまけや番外で絡ませたりはできますので、出して欲しいキャラがいたら言って下さい。
……ただ、キャラの性格や喋り方などに責任は持てないですm
（＿＿）m

では、また次回の駄文に～（；∇；）／～～

## 温泉（前）……行きたくないでござる！？（前書き）

オリ話に挑戦！？

……オリ話でいいんだよね？これ？

俊さん、感想ありがとうございます。
那美&久遠ペアは番外で絡ませていきます。ただ、今回の話で片方が出て活躍？させる……予定です。
私の力量不足で不満な展開もあるかと思いますが、今後ともよろしくお願いしますm（＿＿）m

双麻の頭の上がお気に入りで乗っかるという設定……いただきます！？
（当初は、服の中でぬくぬくするのが好きで首だけチョコンと顔を出すってな感じでした。）

## 温泉（前）……行きたくないでござる！？

なのはｓｉｄｅ

今日は１泊２日で海鳴温泉に行くことになったの。メンバーは私の家族とすずかちゃんの家族、アリサちゃんと執事の鮫島さん、双麻くん……の予定だったんだけど、双麻くんは先約があって無理だったみたい。

……せっかく双麻くんと一緒にお泊まりが出来ると思ったのに～。

「なのは、どうしたの？もしかして酔った？」

考えてた事が顔に出てたのか隣にいるお姉ちゃんが心配して聞いてきた。

「ううん、大丈夫。ちょっと考え事してたの。」

「……はは～ん。双麻くんの事でしょ？」

「にゃっ／／／！？」

「ありゃ、当たっちゃったかな～。」

む～、お姉ちゃんの顔が意地悪なの！

「そういえばなのはちゃんは双麻くんの家族の事、知ってる？」

お姉ちゃんにからかわれてたら、すずかちゃんが唐突に聞いてきた。

「えっと……一応、知ってるよ。」

ゆうひさんの事は双麻くんから口止めされてるから少し答えにくいよ～。

でも、急にどうしたんだろ？

「前に貰ったチケットの件あったでしょ？あれって４枚も入ってたから、家族の人の分もあったと思うんだ。だから、彼の家族にもお礼をしないとってお姉ちゃんと相談したの。」

あ～、なるほど。……けど、双麻くんの家族……ゆうひさんだけど……すずかちゃんと忍さんが会っちゃったら……きっと大騒ぎになっちゃうの。

チラッと前を見ると、こっちの話を聞いた忍さんがお兄ちゃんにも聞いてるの。

う～、どうしよう～！？

私がなんて答えようか迷ってるとお母さんとお父さんが

「一度、双麻くんに聞いてみたらいいんじゃない？」

「そうだね。彼がＯＫを出せば会わしてくれるだろう。まあ、忍さんとすずかちゃんなら彼も了承すると思うよ。」

と助け舟を出してくれた。忍さんとすずかちゃんとアリサちゃんはお母さんとお父さんの言葉に疑問を持ったため、首を傾げてた。

「あいつの親って、どっかの偉い人なの？」

「えっと、今はノーコメントということで……にゃはは（汗」

そう言うとアリサちゃんはそれ以上聞いてこなくなり、すずかちゃんと忍さんも聞いてこなくなった。

双麻くんの話題になったから、余計に双麻くんの事が気になっちゃうの。

（今、何してるのかな～？）

帰ったら、お土産を渡しに会いにいこう。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「ふぇっくしょん！？」

「双麻、風邪でも引いたか～？」

「いえ、大丈夫です。誰かが噂でもしてるんじゃないですかね。」

いきなりくしゃみをしたので、耕助さんが心配して聞いてきてくれた。

俺は今、さざなみ寮にいる。

先日、寮でバーベキューをするから来ないかと言われたので、母さんも仕事でおらず１人になる予定だったので誘いを受けた。その１時間後ぐらいになのはから温泉に誘われたけど、流石にＯＫを出しておいてすぐに断るのもどうかと思い温泉行きは辞退した。

決して、原作に関わるのが面倒というわけじゃないからね！？

それで、今は耕助さんの手伝いでバーベキューの準備中。

ちなみに今いるメンバーは、愛さん・リスティさん・薫さん・知佳さん・真雪さんと子ぎつねの久遠である。本来なら久遠の飼い主で薫さんの妹さんである神咲那美さんもいる筈だったんだけど、急な用事で出かける事になり欠席となった。久遠はお留守番、というかお肉を優先したみたいで那美さんが連れていこうとしたら隠れて出てこなかった。今は俺の後ろをチョコチョコついてきてる。……子ぎつねって可愛いね。

現寮生の人たちは、久しぶりの再会で積もる話もあるから云々で辞退し皆さんでどっかに遊びに行った。

薫さんと知佳さんは長期休暇を取っていて、来週まではいるみたい。美緒さんはバーベキューの事をすっかり忘れてて夜までバイトを入れてしまったみたいだ。寮を出るときの暗い雰囲気は声を掛けづらかった。

母さんに今日の事を伝えたら電話越しでもわかるぐらい凹んでいた。帰ってきたら、どれだけ楽しかったか教えてやろう。

「耕助さん、準備終わりましたよ。」

「わかった～。けど、みんなにもうちょっと待ってるように言ってくれ。後、2人参加することになったから。」

「は～い。」

耕助さんの返事を聞き庭に出て、言われたことをみんなに伝えた。

１０分ぐらいすると、玄関のインターホンが鳴り愛さんが迎えに行った。

愛さんが後ろに2人の女性を引き連れ戻ってきた。

1人は顔馴染みのフィリスさんと、もう1人が桃色の髪を腰辺りまで伸ばした綺麗な女性だった。

他のみんながその2人に挨拶をしているのを、ぼ～っと見ているとその綺麗な女の人と目が会った。

隣にいた愛さんに何か聞いていたら、こっちに向かってきた。

俺の前まで来ると、目線を合わせてくれて微笑みながら

「初めまして。綺堂さくらです。よろしくね。」

「はい、椎名双麻です。よろしくお願いします。」

自己紹介されてさくらさんということに気づいたけど……はぁ～、実際に会うと5割増しに綺麗だな。

そう思い、ジ～っと見てたらニコッと微笑んで頭を撫でられた。

そこで耕助さんがバーベキューの開始の声を掛け、楽しい時間を過ごし始めた。

2時間後、バーベキューも終わってみんなで食後のお茶（何名かはいまだにお酒を飲んでるけど）を飲みながらマッタリとしてる。
俺は相変わらず愛さんに抱きつかれたりリスティさんの膝の上に座らされたり、知佳さん・薫さん・フィリスさんに頭を撫でられたり（真雪さんに至っては服を脱がそうとしてきた）、女性陣の玩具になっていた。
しかし、さくらさんが抱きついてきたのには驚いた。
どうやら、愛さんが癒されるだのいい匂いがするだの暖かいだのと唆されて試しに抱きついてみたらしい。
その時のさくらさんの感想は

「ふふ、愛さんの言った通りあったかくていい匂いがするわね。」

だった。
いえいえ、さくらさんの方がいい匂いでした。と思ったのは心の中に閉まっておいたよ。

そんな時間を過ごしてると、目の前に何かが落ちてきた。
……何だ？と思い周りを見ると、季節はずれの雪が降ってきた。
他のみんなも空を見上げ、雪が降ってきたのに驚いていたけど、さくらさんと薫さんは少し目つきが鋭くなっていた。

（……季節はずれの雪……なんか知ってるような……。）

首を傾げ、俺は考え事をしているとスリープモード中のリアがいきなり念話をしてきた。

『マスター。』

『……もしかしてこの雪に何か関連してる？』

『恐らく。ジュエルシードを感知しましたので。』

『どこ？』

『さざなみ寮の裏にある山の中です。先程、サーチしてみると湖の中にあるようです。一応、この付近一帯にまで結界を張っておきました。』

『なのは達には気づかれてないかな？』

『大丈夫です。彼女たちは少し離れていますし、ジュエルシードの反応がやや特殊でしたのでこの辺りまで近づかなければ感知はしにくいでしょう。』

『特殊？』

『はい。湖の中にある封印がジュエルシード発動と同時に弾け飛びましたので、その力と封印されていた中の力、そしてジュエルシードの力の3種類が混じり合い、ジュエルシード単体の感知は少し困難でしょうね。』

リアの説明を聞いた時に出た【湖の中】、【封印】という単語、そして現在も降っている季節はずれの雪でやっと思い出した。

『これって……まさか。』

『マスターの考えで正解です。少しばかり厄介ですね。』

リアも肯定したため、思わず溜め息が出た。

その時、山の方から

「グォォォォォ！？」

凄まじい雄叫びが聞こえてきた。

……封印されていた魔物、ざからだ。

## 温泉（前）……行きたくないでござる！？（後書き）

え～、ラブちゃ箱で出た魔物さんを使わせてもらいます。

ただ読者様方に先に報告しておきますね

雪女の雪さんと綺堂さくらさんは、ハーレムには入りませんので、期待した方は申し訳ありません。

もう一点

ハーレム構成は、リリカル勢ととらハ勢が双麻争奪戦をする時に力量が均衡するような感じにしようと考えてるんですが……。

まだアバウトにしか決めてませんけどね。こんな感じに←

鉄板中

・ゆうひ↑好感度カンスト、だけど親にしてるからどうしよう…

・なのは↑入れますよ

・フェイト↑当たり前のように入れます

候補欄（とらハ）

・フィアッセ↑絡めやすい

・リスティ↑番外で好感度あげるかな

・フィリス↑展開は考えついてるけど、どうしようか？

・薫&十六夜↑作者的に入れたいけど絡める要素が…
・久遠↑スキル【動物に好かれるを】発動させる
・那美↑……どうしよう？
・知佳↑どうやって入れたらいいかいまだに思いつかない
・美由希↑入れようと思えば入れれる
・美沙斗さん↑入れちゃマズいかな……

候補欄（リリカル）

・リインフォース↑入れる予定
・はやて↑迷い中
・シグナム↑はやてを入れるなら…
・シャマル↑はやてを入れるなら…
・ヴィータ↑はやてを入れるなら…
・ザフィーラ↑……大穴だな、これ（汗
・ティアナ↑展開は考えてるけど

かな……流石に全員覚えてないので、このキャラ忘れてるというのがあれば教えてください。
ただ、唯子・小鳥・弓華・御剣・瞳・七瀬・まなか（？だっけ）・美緒・真雪・みなみ・晶・レン・スバル・ナンバーズも入れる予定ないです。すいません。

年齢が無理だろ！？と思う方々は多々いると思います。
それが嫌いな方は読まないほうが、良いかと……駄文だしｏｒｚ。

というわけですので、まだまだ考え中ですので皆さんの意見……（あればですけど）をも参考にします。
もし、これに決めた！？となりましたら後書きで報告させてもらいます。

では、次回も読んでくれると作者は嬉しいです！！
（；∇；）／～～

## フラグ（中）……既に元祖リア充（真一郎）が建ててるよ！？（前書き）

長くなってしまうため、３編に分けました。

ざからについてなんですけど、どんな姿をしていたとかどんな攻撃をしていたとか等を、ぶっちゃけ忘れたので作者はでっち上げました。

それが気に入らないという方には、申し訳ございません。

福太郎さん、感想ありがとうございます。未熟で至らないところもありますが、今後も楽しんでくれたら幸いです

そして、俊さん・福太郎さん。

ご指摘ありがとうございます。

修正させてもらいました。

もし他に間違いがあれば直していきます。

それでは中編はじまります。

相も変わらず文章力が上がっておらず、駄文ですがよろしくお願いします。

**フラグ（中）……既に元祖リア充（真一郎）が建ててるよ！？**

さざなみ寮の中にいるんですけど、みんなの雰囲気がピリピリしてるし、愛さんは俺をギュッと抱きながら「大丈夫だよ」と声を掛けてきてくれる。

今、薫さんとリスティさんとさくらさんが周囲の確認をしに外に出ていってる。

耕助さんは日本刀（御架月）を持って警戒、フィリスさんと知佳さんはいつものホワンとした感じがなくなり目つきが鋭くなってる。真雪さんは……寝てる（大物だな、この人）。久遠は俺の頭に乗っかりピリピリしてる。……少し放電してるから感電しそうで正直こっちのが怖いです。

みんなの様子を見ていたら薫さん達が戻ってきた。……1人の女性を連れて。

「戻りました。後…裏山に行く道の途中で、この人……雪さんを発見しました。」

薫さんの言葉の後に女性の方が前に出て

「お久しぶりです皆さん。…はじめてみる方もいますね。……封印が解けたいま、以前の当事者の方は記憶が戻っているとおもいますが、改めて私は雪と申します。肩にいるのは氷那といいます。」

雪さんが自己紹介をした後、耕助さん・愛さん・知佳さん・薫さん・さくらさん・リスティさんら（真雪さんは…ｒｙ）は再会を喜んでいた。

「皆さん、またお会いできて嬉しいです。……ですが、今は喜ぶより先にざからをどうにかしなければいけません。」

雪さんがそう言うと、戦闘組の方達の気が引き締まった。

雪さんが、封印が消滅した事とか今のざからが興奮状態で言うことを全く聞かないこと等々、説明してくれた。

それを聞き耕助さんが

「このままじゃ街の方にも被害が！？」

と焦り始めた。

それに対し薫さんが

「いえ耕助さんそれが…この寮から少し下った所から先に進めないようになっているみたいなんです。」

そう返答していた。

それを聞き

『結界はちゃんと起動してるね、流石リア。』

『恐悦至極。と言いたいのですが、咄嗟でしたので皆様も結界内に入れてしまいましたから、あまり褒められることではありませんね。』

『それは仕方ない。瞬時に張っただけでも、俺は凄いと思うよ。まあそれはひとまず置いといて、ざからに結界が壊される可能性は？』

『不確定要素を含め確率は1割を切ります。……それとジュエルシードはざからの体内に入ってしまっており、もし封印するならざからを倒すしかありません。』

『う～ん、俺がやって倒す確率と耕助さんらが倒す確率ってわかる？』

『マスターの場合は不確定要素込みで9割を確実に超えます。周りの方達ですと、5割～6割と予想します。怪我付きですが』

リアの言葉に少し驚いた。だって、ここにいるメンバーって大概だから。

『マジで？みんなかなり強いよ、それに久遠もいるし。俺的にざからはフルボッコされると思ってた。』

『今のざからはジュエルシードが体内に入り力が湧いている状態ですので、足止めするなら彼女達でもできるでしょうが倒すとなる少し難しいですね。』

それを聞き、怪我をさせるのは嫌だなと思ったので決めた。

『ふぅ、リア。やりますか。』

『ｙｅｓ。』

とりあえずみんなをどうにかしよう。……手っ取り早く睡眠魔法で

眠らしてその間に終わらせよう。
そう考え、愛さんにトイレに行くと言いリビングを出た。
トイレに入り
「よしリア。セットアップ。」
『……あの、ほんとにいいのですか？』
？何か問題でもあるのか？
「？？別にいいけど……？」
『……はあ、わかりました。セットアップ。』
なんで念話のままなんだろうと疑問を感じつつバリアジャケットを装着した。
俺のバリアジャケットはそのまんまｂｌａｃｋｃａｔのクロノナンバーズの服装だ。
※わからない人は申し訳ありませんが、ｂｌａｃｋｃａｔをお読み下さいｍ（＿＿）ｍ
「よし次ｈ「くぅ～ん♪」……へっ？」
次に遠隔で睡眠魔法の準備をしようとしたら、なんか鳴き声が……
……。

『だから、いいのですか？と聞いたんです。』

リアに呆れられた。
久遠が頭の上にいることをすっかり忘れてたｏｒｚ
っていうか、馴染みすぎだ久遠。

凹んでいると、久遠が降り人型（子供ｖｅｒ）になって聞いてきた。

「ソーマ、へんしん？」

首を傾げ聞いてくる久遠。……可愛いと思う俺は間違いじゃない。

「ん～、あ～、……内緒だよ久遠。」

説明してもきっと理解しないから口止めだけしておこう。

「ん～、うん。ソーマ、久遠、へんしん。一緒♪」
訳）わかった。ソーマも久遠と一緒で変身できるんだね。お揃いだ～♪

……なに、この子。…萌えるんだけど……「……マスター#」…ッ！？
久遠のあまりの破壊力に思わず一瞬トリップしてしまった。
いかんいかん。

「ゴホン。リア、改めて睡眠魔法【ヒュプノ】起動、場所はリビングにいるみんなで。久遠は……仕方ないから連れていこうか。」

「ｙｅｓ。……この件が終わったらＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩです。」

……orz

少しして戻り、リビングにいた人達が寝ていることを確認……したんだけど、2人ほど足りない。

「……え～と、雪さんとさくらさんがいないね……何故？」

「リビングにいなかったのではないですか？探しましょうか？」

「お願い。」

リアに2人の探索を任せて、倒れるように寝ている人達の体勢を直してあげた。

「見つけました。……雪さんはざからの方に向かってます。その少し後方にてさくらさんが追いかけてますね。」

その言葉を聞き、すぐに裏山へと向かった。

雪side

庭に出て、山の方を見ているとざからがこっちに向かっているのを感じた。

「……このままじゃ皆さんに被害が……氷那、行くわよ。」

肩にいる氷那に言い、駆け出した。

途中で、ざからの触手が襲いかかる。

「このっ！？」

向かってくる触手を凍らし砕く。氷那も援護をしてくれ、進んでいき湖の近くにある広場へと着いた。

そこには……

「えっ？……なんで？なんで……あなた様が！？」

そこにいたのは大昔、共に戦った方……骸様が立っていた。

信じられない光景に唖然としていたら、氷那が教えてくれた。

「あれは……ざからなの？でも、どうして骸様の姿を……。」

氷那の言葉とざからの姿に混乱していると

「危ない！！」

「キャッ！？」

ドガァァン！！？

後ろから誰かに押し倒された。その後に何かが激突した音も聞こえた。

「クッ……雪さん、怪我はない？」

押し倒した人を見るとさくらさんだった。そして、さっきまでいた場所を見ると、ざからの触手が地面に刺さっていた。

「ありがとう、さくらさん。」

「いいのよ。それにあなたが傷ついたりすると真一郎さんが悲しむもの。」

「……そうですね。彼が悲しむ顔は……見たくありませんね。」

真一郎さん……以前、同じように封印が解けた時、私を愛してくれた愛しい人。

彼の事を思い出し、心が暖かくなった。

「それに……いるんでしょ？彼の子が……。」

さくらさんは私のお腹をチラリと見て、そう言った。

「……はい。」

彼に愛してもらったあの時に、私は身ごもった。

「なら、余計に雪さんには傷ついてもらうわけにはいかないわ。……だけど、かなりマズい状況ね。」

そう言い周囲を見るさくらさん。

私達の周りには無数の触手が鎮座していて、今にも襲いかかってきそうだった。

「雪さん、あの人？がざからなのかしら？」

触手の向こうにいる人間を見てさくらさんが聞いてきた。

「はい。ただ……何故ざからがあの姿に…骸様の姿になってるいるのかわかりませんけど。」

「そう……それはひとまず置いておきましょう。それよりも……ッ！？」

「さくらさん！！？」

さくらさんに触手が襲いかかり、思わずそちらに気がとられた瞬間、私の方にも襲いかかってきた。

反応が遅れたため、それをかわす事ができないことを悟った。

（ああ……私、死んじゃうな……彼に会いたかったな。……死にたくない！会いたい！！また彼の笑った顔が見たい！！！。）

死ぬと思い目を瞑った瞬間、彼の事が脳裏に浮かび…私は心の底か

ら生きたいと願った。

ヒュンッ！！ヒュッヒュヒュヒュヒュッ！

何かを振る音が聞こえた。

……刹那？数分？

いつまで経っても何も起きないので、恐る恐る目を開けると

視界に映ったのは、金色。

それが髪だと気づき、よく見ると黒いコートを着て、長く綺麗な金の髪を靡かせている女性がいた。

「間一髪でしたね。」

女性がそう言った後、視界の横で閃光が走り、前にあった触手をなぎ払いながらざからに当たり

ドガァァァァン！？

爆発した。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

さくらｓｉｄｅ

失敗した！！！

あの触手が襲ってきた時、咄嗟に避けたのはいいけど雪さんと少し離れてしまった。そしたら、雪さんがこちらに気をとられた隙にあちらにも攻撃が襲った。

雪さんは反応できていない。

（マズい！？ッ！？）

向こうに気を取られた瞬間、いつの間にか這い寄ってきた触手に足をとられ、体勢を崩される。
なんとか足の触手を引き裂いたが、隙ができてしまったため他の触手が好機とばかりに襲ってきた。……捌ききれない。

数本は捌いたが、それが限界。
思わず目を瞑り、想った。

（真一郎さん、ごめんなさい。）

そして

ピシャァァァッ！？バリバリィィィィッ！！！！！

甲高い空気を引き裂くような音が聞こえ、その後に

「くぅ～ん♪」

聞き覚えのある、この場には似つかわしくない可愛らしい声が耳に届いた。

「久遠……？」

目を開けると、目の前に人型（大人ｖｅｒ）の久遠が尻尾を振りながら立っていた。

「さくら……大丈夫？」

と心配してくれたので、その事と助けてくれた事にお礼を言おうとした……けど、雪さんが！？

その事を思い出し、雪さんの方を見ようとした瞬間、視界に一筋の閃光が走った。

（……えっ！？）

それに驚き……次に

ドガァァァァン！？

爆発音が私の耳を叩いた。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

## フラグ（中）……既に元祖リア充（真一郎）が建ててるよ！？（後書き）

あれですね。

効果音の書き方などの描写はこれでいいんだろうか？と疑問に感じます。

後編にある戦闘描写が、ちゃんと書ける感じがしねぇｏｒｚ

……頑張ってみます。

ただ、仕事が忙しいので更新が少し遅れます。楽しみに……してくれてる方がいるかはわからないですが……申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

では、また次回

（；∇；）／～～

**ざから……不吉を届けに来た！！（前書き）**

……

……戦闘描写ムズェｏｒｚ

……これが現在では限界でした（Ｔ＿Ｔ）

**ざから……不吉を届けに来た！！**

「2人は……大丈夫みたいだな。」

魔砲をお見舞いした後、2人の安否を確認し

「リア、戻って。久遠は2人をお願い。」

リアと久遠に指示を出す。

「わかりました。」

「うん♪」

2人は返事をして、リアはリングの中に戻り、久遠はさくらさんと雪さんの側に行き少し離れた。

爆煙が晴れていき、ざからの様子を見るけど……

「……あれぐらいじゃぁ、やっぱ効いてないねぇ。」

全く堪えた様子もなく、傷一つなく立っていた。

「……グゥゥ。」

さっきの攻撃で、俺に標的をかえ、こちらを向く。

「しかし、あの姿もジュエルシードの影響かね～？」

「でしょうね。」

俺の言葉にリアが同意する。

「まあどうでもいいか。闘りやすくなってラッキーと思っていこう。……ジュエルシードの位置は？」

「心臓部です」

「了解。

じゃあ……ざから！？いっちょ闘りますかぁ！！！」

「グァァァァ！？」

俺の宣言と同時にざからが吼え周りの地面から更なる触手が現れ、俺に襲いかかる。対して俺は、ハーディスを左手に持ち替え、右手にクライストを顕現し襲いかかってくる触手を斬り払いながら、ざからに突っ込んでいった。

久遠・さくら・雪ｓｉｄｅ

「ァァァァァァァ！！！」

ズガガガガガガァァァン！？

久遠が放つ雷は、さくら達の周囲にある触手を問答無用で焼き払っていく。

ザシュ！ザシュッ！？

雷で掃討できずに残った触手が襲いかかるが、久遠の爪により引き裂かれていく。

放つ。引き裂く。放つ。引き裂く……。

これをいくらか繰り返していると触手が　辺りにいなくなり久遠は止まり、警戒しながら周囲を確認する。

「……ゥゥウ。……いなくなった。」

完全に触手の気配がなくなり緊張を解き、さくらと雪の方を見て怪我がないか確認する。

「怪我……ない？」

「はい。ありがとうございます。」

「ええ、久遠ありがと。……それより、双麻くんは一体？」

久遠の言葉にお礼を言ったあと、さくらが双麻の方を見て呟く。

数時間前までは極普通だった少年が今ではそこらの達人なんて目じゃないような動きをして、さらに不可思議な力（魔砲）を使いざからを圧倒しているのを見て、何者？と疑問を抱く。

雪も双麻の方を見ると……

前後左右上下から襲いかかる触手を流れるようにゆるりと時には残像を残す程の速さを出し迎撃し、魔砲を撃ちざからにダメージを与えていく姿があった。

それを見て

「……凄い……ざからを相手に…。彼は……。」

驚愕する。

驚くのも無理はないだろう。ざからは全方位…果ては地面までから攻撃してくるのにそれをかすり傷一つ負わず完膚なきまでにかわして迎撃する上に攻撃まで行っているのだ。４００年前に共に闘った骸も達人レベルで人の中では最強レベルだったが、ここまでではなかった。

故に思う。

「彼は……何者ですか？」

その疑問にさくらもわからず

「私もわかりません。双麻くんとは今日、初めてあったばかりですし。ゆうひさんの息子というぐらいしか…。久遠は知っていたの？」

と聞いてみた。

「双麻は…双麻だよ。……お日様の匂いがして優しい。……だから好き♪」

あまり答えになっていない返事だった。

けど、久遠が言った言葉はある意味で的を得ていた。

双麻が何者であろうと優しい心を持った人であること。

それを理解し

「……そうね。私も人の事を言えないのだし。ただ……これが終

わったら説明ぐらいはしてもらおうかしら。」

さくらは後で説明してもらうことにして1人と1匹の闘いを改めて見ることにした。

雪は

「……これは…喜び？楽しい？……ざからから…。」

ざからの感情が伝わってきて、その感情に困惑していた。
何故ならつい先刻まで感じられた負の感情がなくなり、代わりに喜びや楽しい等の感情が感じ取れたのだから。

「♪～、楽しそう。」
久遠もその感情を感じ取り、そう呟いた。

ざからｓｉｄｅ

（チイサイヤツ……オボエテイルチイサイヤツ……チガウ。
……チガウケド……ツヨイ…。）

瞬間、ざからの脳裏に大昔の骸の言葉が蘇った。

「俺の子孫がまたおまえに会いにくる。そんときは……また相手をしてもらえ。」

（……キタ！？キタ！？アノチイサイヤツイッテイタ…シソン。
コイツダ！？……ツヨイ、マタアソベル！マタ……アノ…イヤジ

ャナイ……カンジガ……！？）

ざからはその感情がわからない。だけど……決して嫌な感じではなくむしろもっとたくさん感じたいと思った。故に

「グォォォォォォォォ！！！！！！！！」

更なる雄叫びを上げ、攻撃を苛烈にしていった。

その感情は……小さい子供が共に遊べる友人が出来た事に無邪気に喜ぶのと同じ……それは歓喜。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ざからの雄叫びが上がり攻撃が苛烈になったけど、……さっきの雄叫び

「……ハハッ」

「マスター？」

いきなり笑ったのでリアが俺に疑問を抱いたため、聞いてきた。

「いやなに。……ざからのやつが喜んでいやがるなぁと感じてな。」

答えてやると

「そう……なのですか？……私にはわかりませんけど。」

「まあ、俺がそう感じただけだし、っと！？」

リアとの会話に気を取られていたら、触手が……

「まずっ！？」

触手が前後左右上から一斉に隙間なく襲ってきやがった！

「チッ。リア！！！！」

避ける暇がないと思ったのでリアに指示した。

「ｙｅｓ。プロテクション、展開。」

バチィッ！？ドガァ！ガァン！！ボゴォ！！！ズドォォン！！！！！

（防御は成功したけど、周りにも着弾したから土煙が……）

周囲が土煙で見えなくなり追撃を警戒していたら

「ッ！？マスター！前方に高エネルギー反応！！」

リアの言葉と同時に土煙を捲りながらレーザーのようなものが飛来してきた。

ドガァァァァァン！？

プロテクションを咄嗟に張ったが爆発の衝撃が俺を襲った。

ざからｓｉｄｅ

（……オワリ？……マダ……タリナイ。モット…モット……アソビタイ……。）

まだ遊びたいと思うざからだが、先の砲撃は直撃した手応えがあり爆煙が巻き上がる中、少し待ってみても音沙汰がないため、終わったと思った。

（……マタ……）

遊ぶ相手がいなくなり虚無感を感じるが、その感情がざからにはわからない。
自分の中からもやもやした感じを振り払うため、少し離れた所にいる久遠たちを壊そうと思い振り向こうとした瞬間

（……ゥ？……カラダ……ウゴカナイ？）

自身の体が何かに縛りつけられたらように動かなくなった。
体を見てみると、何かが己の体を締めつけている。それは、糸であった。糸を視認してこれが己を動けなくしていることに気づいたと同時に

（ッッッ！？……コノカンジハ！？）

ざからにとって初めての感覚。本能が警告する。危険、逃げろと。
だが、ざからは初めて味わうこの感覚に戸惑うばかり。その時

「おいおい。まだ終わってねーぞ。」

煙の中から声が聞こえた。瞬間、煙が晴れてそこにいたのは
服はボロボロになっており、顔が土で汚れてはいるが傷一つない双
麻が立っていた。……目を金色に光らせながら。

side end

俺は自身の体に被害がない事をチェックしながら思った。

（痛ぇな、畜生が。……なんか腹が立ってきた。そういやなんで
休日にこんな痛い思いまでしてバトってんだ（イライラ。……ざか
らは別段悪くない。ジュエルシードだ、ひいてはあの淫獣ヤローが
ばらまいたせいだ。）

と理解はしてもイライラが収まる事はない。

（ざからには悪いが……このイライラをぶつけさせてもらう！！）

そう決めた俺はリアに指示する。

「リミッター3解除。さざなみ寮にいるみんなと久遠達に最硬度の
プロテクションを。後、結界も強化。……ぶっ殺す！！！！」

「ｙｅｓ。……程々にしてください。…といっても聞いてませんね。」

リアが何か言ったが、無視した。エクセリオンで縛りつけている糸に雷を走らせる。

「ァァァァァァ！！」

いきなり自身を縛りつけている糸からの痛み、熱さに声をあげるざから。

その間に縮地でざからに肉薄する。

「逝っとけ。」

シュッ！ザシュッ！ザシュッ！！ザザザザザシュッ！！！！！！！！

クライストを振るいざからの四肢を切断、胴を切断、首を切断、縦に切断、十字に切断、９分割にする。

「……ゥァ。」

どこに喋る要素があるのかわからないが、呻き声をあげるざから。

だが、切断した箇所から細長い肉が伸び再生しようとするが、俺には充分な時間。

「悪いな。おまえも被害者には変わりないが……俺がいたことが運の尽きだったな。年貢の収め時だ。」

そう言いながらエクセリオンとクライストを収納してハーディスを

顕現。
ハーディスに魔力を込める。
銃口をざからに向け魔力弾を精製。
トリガーを3回弾く。
ドキュッ！ドキュッ！！ドキュッ！！！
銃口にある魔力弾が更に大きくなり内包する力も強大になる。
中で暴れ狂う力の余波が漏れ、バチバチと音をたてる。

「あの世で骸に会って遊んでもらいな。……今生での不吉をプレゼントだ。」

「……ァリガトゥ。」

どんな思いを込めていったのかわからないが、確かに聞こえた。
そして

「じゃあな。」

発射。
轟音、閃光。
続いて見ていたものと双麻の視界は光に染まる。

光が収まった後に残ったのは、更地と有り得ない程でかいクレーターだった。

元々あった山、森、湖が綺麗さっぱりになくなっている。

さくらさんと雪さんはこの光景に唖然。
久遠は「すごいすごい」とはしゃぐ。
リアは「やりすぎです」と呆れていた。

その後、我に返ったさくらさんにこの惨状はどうするんだ！！と説教を喰らい、それについて大丈夫ですよ～と言いリアに結界を解除してもらい元の自然に戻したら、また呆然。
今度はさっきよりも早く我に返り、俺の事についてまくし立てるように説明を求めてきた。
さくらさんと雪さんに俺が魔法を使えることなどを説明し、口止めをお願いした。

「ふぅ。わかったわ。私も助けられたんだし。誰にも言わないから安心して頂戴。」

「私もです。……それに…ざからの事もありがとうございました。」

雪さんはざからの事も含めお礼を言ってきた。

「別にいいですよ。最後は個人的な感情でやってしまいましたし。
……そうですね、雪さんには１つお願いが。」

「はい、何でしょう？」

「雪さんの好きな人と生まれてくる子供と一緒に幸せに暮らすこと。これが、お願いです。」

「……はい！？」

俺の言葉を聞きキョトンとした後、それを理解したのか花が咲いたような笑顔を浮かべ返事をしてくれた。
それを見て、こんな美人で可愛い人と一緒にいれる真一郎さんに少し嫉妬をしたので

「……さくらさんも大変ですね～。これから真一郎さんが雪さんとその子供に構いっきりになるかも？」

「……否定できないのが少し悔しいわね。帰ったら、先に…（ブツブツ。」

と考え出すさくらさん。その身から少し黒いオーラが出てるのは気のせいではないだろう。真一郎さん、ざまぁ（笑。

「双麻、くおん頑張った。」そんな事を考えているとおんぶをしてあげていた久遠が褒めてと言わんばかりに言ってきたので

「ん、久遠も頑張ったな。後で、油揚げをたくさんやるよ～。」

と言ってあげたんだけど

「……むぅ～。」

何が不満なのか唸る久遠。
すると背中から降り、前に回ってきたと思ったらいきなり俺の顔を

両手で挟みこみ

「ん♪」

「ッンン！？」

「なっ！！？」

「あらあら♪」

「ほわぁ。」

久遠がキスをしてきた。リアは驚愕、さくらさんは微笑ましく、雪さんは他人がキスするのを見て少し照れ、当の久遠は

「〜〜♪」

ご機嫌になって尻尾をフリフリ。

いきなりの事に困惑しながらなんとか頭を正常に戻し久遠に聞いてみた。

「久遠、なんでキスを？」

「ん〜、リスティいってた。褒めてもらうときチュ〜お願いしたらくおん嬉しい。だから、した。♪♪当たってた、くおん嬉しい♪」

と説明してくれた。

「……あの人は」

久遠の説明を聞き、リスティさんに呆れていたら

「アハハハハ」

乾いた声を漏らすリア。……なんか怖い（汗。

「……以前の事といい、つくづくやってくれます……少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆Ｓｉが必要ですね……。」

（……巻き込まれたくないなぁ（涙。）

そんなリアの声を聞き遠い目をする俺。
そこで雪さんが何かに気づいたように声をあげ

「そういえば双麻くん…でしたね、真一郎さんの事を知ってたんですね。」

と聞いてきた。
……いえ、会った事はありませんよ。原作を知ってるだけです。
そんな事を内心で思ってたらさくらさんも

「……そういえばそうね。……何故、私と真一郎さん、雪さんと真一郎さんの関係を知ってるのかしら？」

説明しろや、ゴラァみたいな目をして口だけは笑うという顔をして詰め寄るさくらさん。
俺は

「……企業秘密です。……けど、Yシャツ一枚で誘惑するのはアリだと思いますよ、さくらさん。」

爆弾を落としてあげた。

「??……ッ!?／／／／／／／～～～ッ、双麻くん!?それをどこで!?」

最初はわからなかったけど、少し考え思い当たり顔を一気に真っ赤にして叫ぶさくらさん。

「キャー、助けて～忍さ～～ん、すずか～～～!!」

棒読み口調で忍さんとすずかの名前を出し逃げる俺。

さくらさんはその名前が出た途端、ピタッと止まり

「あの娘たちはーーーーーーーーー!?」

何故、俺が2人と親戚だと知っているのかなんてどうでもいい感じで叫ぶさくらさん。

寮に戻ったら、みんなが起きていて「どこに行ってたんだ」「心配したんだぞ」と怒られました。

ざからについては知らんぷりを決め込み、さくらさん達に丸投げしておいた。

こうしてかなり疲れた休日は幕を閉じた。

「そういえば…リア、ジュエルシードは？」

「マスターがざからを切断したときに、即座に封印処理し回収しておきましたよ。」

「吹き飛ばしちゃったと思ってた。」

おまけ？
その日の夜

「リスティさん！！久遠に何を教えてるんですか！？」

「はっ？なんの事？」

「……褒めてもらう時の事です。」

一瞬、キスと言おうとしたけどやめておいた。
それに思い至ったリスティさんはニヤニヤしながら

「ん～、もしかしてキスの事かな～？それを知ってるということは……やられたな。」

と言いやがった。

俺はそれを聞き反応を楽しんでやがると思い、何を言ってやろうかと思考を走らせていると

「まあまあ、美少女とキスできたんだから、いいじゃないか。……まあ、お詫びに……（チュッ。」

と言いながら俺の頬にキスをしてきた。

「なっ／／なｎ「もう許しません！！！！！！」……はっ？うおっ！？」

驚きのあまりリスティさんに抗議しようとすると横合いから聞き覚えのある声がして、引っ張られ誰かに抱きしめられた。

見上げてみると

……リアだった。

ちなみにリアは、ｂｌａｃｋｃａｔのセフィリアと容姿は全く同じ。（中身はもう別人だけど）

俺はリアが人型になり現れた事に焦り

「ちょっ！？リア！！なんでけんｇ「マスターは黙っていて下さい！！」…はい（怖っ）。」

言おうとしたけど、怒鳴られ黙った。

リスティさんはいきなり現れたリアに驚き手に持っていた煙草を落とした。

（あ、火事になる。）

そう思った。

その間リアはリスティさんに「以前からマスターに対する馴れ馴れしい行動を～」とか「私だってまだ～」とか「羨まし…じゃなく、…」等、文句を言いリスティさんは「はあ」「えーと」等、最初の方は困惑していたけどリアの「マスターは渡しません！」という宣言に何か琴線に触れたのか反撃という名の口撃を始めた。

※しばらく音声のみでお送りします。

「はっ、いきなり現れたと思ったらなに？双麻は渡さない？笑わせるね、というか君、誰？」

「私はセフィリアです。マスターのパートナーにして生涯マスターを支えていき、マスターを敬愛しマスターに尽くす存在です！？……フッ、あなたには無理でしょう。」

「はん、それぐらい何？それぐらいだったらボクでもできるよ。双麻に尽くす？双麻が望むなら毎日抱きながら過ごしてあげるよ、もちろん夜だって…ね。双麻を敬愛？むしろボクの方が双麻を愛してる事に関して上だね。……ねんねの君にはできないだろうけど。」

「（この2人は何を言ってるんだ？しかも言ってる事を理解してるのか？……してないんだろうなぁ）」

「なっ！！？何を不埒な！そんな羨まｓ…ではなく不健全な行為は絶対にさせません！！」

「君に許してもらう必要はないね。双麻だってボクと一緒にいる方が嬉しいんだぜ。な、双麻（グイッ。」

「マスターを返しなさい（グイッ。マスターはいい迷惑だと常日頃から思っていますが、広大な海のような優しい心を持った方ですのでそれを口に出さないだけです。ですよね！？マスター！」

「……（俺に振らないで（涙。ってか引っ張られて痛い。）」

「ほら双麻が嫌がってる。返しな（グイッ。」

「そんなわけありません！マスターは私の事を綺麗で大好きと言って抱きしめてくれました！なので、嫌がられているのはあなたです、返しなさい（グイッ。」

「（綺麗なのは認めるけど……言ったっけ？しかも抱きしめてないし……苦しいってか痛い）」

「ボクだって双麻に綺麗で美人で結婚したいだって言われたね。しかも…初めてをあげたし、もらったし。」

「（……綺麗で美人は認めよう。ただ、結婚したいとは言ってない。そして、そんな事実はない。）」

「……なっ！？本当ですか、マスター！？」

「（リアは四六時中、俺の側にいたんだから気づけよ、俺の貞操は無事だ。……あっ、キスの事か）」

「何故、黙っているんですかマスター……そうですか、襲われてし

まったんですね、可哀想に。……今、諸悪の根源を駆逐しますから安心して下さい。」

「何、やるの？上等！」

「えっ！？なにクライスト構えてんの！？リスティさんはトライウィングスを何で展開してんの！？ちょっ、ストップ！！ニャアーー、誰か助けてーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

俺の叫び声を聞いた知佳さん、薫さん、耕助さん、真雪さん、愛さんが来て2人を見て急いで止めてくれた。………助かった（涙。

リアの事がバレて問い詰められ魔法のこともみんなにバレました。その時の反応は「ふ～ん」だとか「凄いね～」だとか割と淡白な反応。

曰わく妖怪やら超能力やら霊能者がいるんだから魔法使いがいるのも納得できる。……流石、人外魔境に住む人達、そこに痺れる！？憧れるぅ！？

◆後日

ピンポーン

「は～い」

インターホンが鳴り、母さんが出る。

「……ぶりやん。……ぅしたん？」

「……」

リビングでゴロゴロしてた俺は母さんの友達か？と思い、顔を上げる。すると、リアが念話をしてきた。

『……マスター。激しく嫌な予感がします。』

『？？？はあ？』

唐突なリアの念話に疑問を上げると母さんが戻ってきた……後ろに見たことのある1人の女性と一匹の動物を連れて……

「ハ～イ♪双麻。」

「くぅ～ん♪」

……リスティさんと久遠だった。

久遠は俺を見るとすぐに駆け寄り定位置に乗っかる。

「えっと……遊びにきたの？」

と聞くと

「今日からここに住むから。」

「くぅ～♪」

……ハッ？

あまりの言葉に理解が追いつかない。

……ギギギッと音をたてるかのように母さんの方に首を向けると

「や～、なんやリスティがいきなりここに住みたい言うて最初は驚いたんやけど、もう寮の方も退寮した言うてな。別にうちも部屋は空いとるしええかな～と思うて。双ちゃんも問題ないやろ？」

その言葉を聞き急いで電話に駆け寄りさざなみ寮の耕助さんに掛け聞いてみたら

「……すまん（ガチャン。」

一言言って切りやがった……（泣。

トボトボ歩きリビングに戻った後、そういえば久遠は？と聞くと

「久遠もここに住みたいって言ったから連れてきた。薫と那美もＯＫだってさ。」

「くぅ～♪」

……まあ、もういいや。そういやここって動物ＯＫだったな、母さんが猫を飼いたいって言ってたから。

母さんの方を見ると既に久遠を抱き寄せご満悦。リスティさんは自

分の部屋を決めるため、リビングを出て行った。

『（ギリギリギリッ。……その勝負受けて立ちましょう＃＃＃』

これから毎日リアとリスティさんの衝突を考えると……胃が（泣。

◆おまけ？

月村邸にて

「「ただいま～」」

忍とすずか、メイドの2人が温泉から帰り自宅に入ると

「お帰りなさい」

最近は顔を出さない2人の親戚、綺堂さくらがいた。

「あ、さくら来てたんだ。」

「さくらさん、こんにちは～。」

「さくら様、いらっしゃいませ。」

「いらっしゃいませ～。」

４者がそれぞれの反応をする。

「ええ……それと忍……すずかちゃん……双麻くんって知っているかしら？」

そう聞いてくるさくら。２人は首を傾げたが、まあ知っているので

「知ってるわよ。」

「うん、お友達だけど…」

と返事をした瞬間、さくらから黒いオーラが滲み出てきた。

「そう……２人とも少し……Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしましょうか。」

２人の襟を掴み引きずり、連行する。

「えっ？ちょっ！？なに！さくら、どうしたのよ！！」

「ふえぇぇぇ！！？」

「……大丈夫……答えは聞いてない。」

「「えぇぇぇ！！」」

双麻によって引き起こされた理不尽な被害が２人に襲いかかった。

「「？？？」」

ノエルとファリンは状況が全く理解できず首を傾げる。

「「イヤァァァ！！！」」

夜の帳の中、月村邸から叫び声が木霊した。

**ざから……不吉を届けに来た！！（後書き）**

リスティ、久遠！！
勢いで同棲決定！！！
反省も後悔も

してます。m（＿＿）m

やっちまった感があるけどやっちまったものは仕方ない

今後も自重せずに書いていくと思います。
リリカル勢のヒロインにも頑張ってもらいますので、どうか見捨て

ないでください

では、また次回に

（；∇；）／～～

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6230t/

---

リリカルとらハ～mixバージョン～

2011年8月18日19時45分発行